

藤井寺市

# 川 北 遺 跡 3

バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2018年11月

公益財団法人 大阪府文化財センター



藤井寺市

# 川 北 遺 跡 3

バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



# 序 文

本書は、当センターがバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴い、平成 29・30 年に藤井寺市川北 1 丁目地内で実施した発掘調査に関する埋蔵文化財発掘調査報告書です。

川北遺跡の所在する藤井寺市域は、古来より大和川や石川の水運に加え、長尾街道（大津道）や竹内街道（丹比道）が交わる水陸の交通の要衝として発展してきました。遺跡の南方には百基以上の大小様々な古墳が築かれた古市古墳群が、東から南側には旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である船橋遺跡が立地する他、山側に目を転ずると、山麓には古代寺院の痕跡を幾つも辿ることができます。

交通の要衝として人の往来が盛んだったこと、河川を利用した水の確保が容易であったことなどから、当遺跡を含む一帯では古代以来より人々の活発な活動がうかがえます。そして宝永元（1704）年には、大和川が現在の位置に付け替えられて景観は大きく変化しました。調査地の周辺は安定した生産域として利用され、現在では都市近郊の宅地として開発が進められています。

今回の調査では、これまでの調査でもみつかっている旧大和川の流れの一部を検出しました。河道は変化しながら集落域を浸食したためか、縄文時代中期から中世にかけての多種多様な遺物が出土しています。これらの遺物は、当遺跡周辺で活動していた当時の人たちの姿を垣間見ることのできる、貴重な資料となりました。

最後になりましたが、調査にあたっては地元の皆様をはじめ、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所、オリエンタル白石・みらい建設工業・コーセン建設 JV、大阪府教育庁、藤井寺市教育委員会など関係諸機関の方々にご指導とご協力を賜りました。厚く感謝を申し上げますと共に、今後とも当センターの調査事業に、より一層のご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 30 年 11 月

公益財団法人 大阪府文化財センター

理事長 田邊征夫



# 例 言

1. 本書は、大阪府藤井寺市川北 1 丁目地内に計画されたバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に起因する川北遺跡（その 3）・（その 4）の発掘調査報告書である。調査名は川北遺跡 16 - 1 と川北遺跡 18 - 1 である。
2. 発掘調査はバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴い、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所から委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業の受託契約、受託期間、および調査体制については以下のとおりである。  
バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う川北遺跡発掘調査委託（その 3）  
受託契約期間 平成 29 年 1 月 4 日～平成 29 年 6 月 21 日  
現地調査期間 平成 29 年 1 月 4 日～平成 29 年 3 月 31 日  
整理期間 平成 29 年 4 月 1 日～平成 29 年 5 月 31 日  
調査体制 事務局次長 江浦 洋、調整課長 岡本茂史、調査課長補佐 三好孝一、  
副主査 若林幸子  
バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う川北遺跡発掘調査委託（その 4）  
受託契約期間 平成 30 年 7 月 2 日～平成 30 年 11 月 30 日  
現地調査期間 平成 30 年 7 月 2 日～平成 30 年 7 月 31 日  
整理期間 平成 30 年 8 月 1 日～平成 30 年 8 月 31 日  
調査体制 事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 三好孝一、  
調査課長補佐 亀井 聡、主査 佐伯博光
4. 川北遺跡発掘調査（その 3）では、以下の測量委託を実施した。  
川北遺跡（その 3）発掘調査に伴う基準点測量 株式会社南紀航測センター大阪支店  
平成 29 年 1 月 12 日～平成 29 年 3 月 10 日
5. 本書で用いた現場写真は若林・佐伯が撮影し、遺物写真については、写真室が担当した。
6. 調査に際しては大阪府教育庁、オリエンタル白石・みらい建設工業・コーセン建設 JV のご指導・ご協力を得た。
7. 本書の作成および執筆、編集は若林・佐伯が行った。執筆分担は目次に示す。
8. 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

# 凡 例

1. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）を用いた。
2. 座標は、世界測地系に基づく、平面直角座標系第VI系により表示している。単位はmであるが、図中では単位を省略している。
3. 本書で用いた北は座標北である。座標北に対して、磁北は $6^{\circ} 47' 18''$  西へ、真北は $0^{\circ} 12' 42''$  東へそれぞれ偏移する。
4. 現地調査ならびに遺物整理は、当センターの定めた『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土色標記は小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』平成19（2007）年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
6. 遺構番号は、遺構面・種類に関係なく、検出順にアラビア数字の通し番号を付与し、その後に遺構の種類を標記した。
7. 各遺構図・遺物実測図の縮尺は、それぞれの図に縮尺を明記したスケールを付している。原則として全体図を200分の1とし、必要に応じて縮尺を変えている。遺物実測図の縮尺は4分の1を基本としたが、それ以外の縮尺を用いた場合もある。同一の図版で異なる縮尺のものを掲載している場合は、スケール横に対象となる遺物掲載番号を記した。須恵器断面、土器の墨書部分、木製品の炭化部などにはアミカケを施した。なお、写真図版の遺物において、土器などは任意の倍率である。
8. 遺物実測図中の各遺物に付与した番号は、写真図版と一致する。
9. 古代から中世の遺物に関しては、以下の文献を参考にした。  
古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』  
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』（有）真陽社  
古代の土器研究会編 1997 『古代の土器研究』第5回シンポジウム資料  
財団法人 大阪府文化財センター 1998 『河内平野遺跡群の動態』IV  
古代の土器研究会編 2005 『古代の土器研究』第8回シンポジウム資料  
小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究  
—日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀』（有）京都編集工房



# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次

第 1 章 調査に至る経緯と経過	（若林・佐伯）	1
第 1 節 調査に至る経緯		1
第 2 節 発掘調査・整理作業の経緯と経過		3
第 2 章 位置と環境	（若林）	4
第 1 節 遺跡の位置と地理的環境		4
第 2 節 歴史的環境		5
第 3 章 調査の方法	（若林・佐伯）	8
第 1 節 現地調査		8
第 2 節 整理作業		10
第 4 章 16－1 の調査成果	（若林）	11
第 1 節 基本層序		11
第 2 節 検出遺構と遺物		15
a. 遺構の検出状況		15
b. 遺物の出土状況と時期		19
第 5 章 18－1 の調査成果	（佐伯）	37
第 1 節 基本層序		37
第 2 節 検出遺構と遺物		40
a. 遺構の検出状況		40
b. 遺物の出土状況と時期		43
第 6 章 総括	（若林）	46

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

図1	調査地位置図	図12	16-1	第3層等出土土器(2)
図2	調査区配置図	図13	16-1	第3層等出土土器 〔瓦・木製品・土製品含む〕(3)
図3	周辺の地形環境図	図14	16-1	第3層等出土土器(4)
図4	周辺の遺跡分布図	図15	16-1	サヌカイト製石器
図5	地区割り図	図16	18-1	1区 東西断面図
図6	16-1 東壁観察用断面図	図17	18-1	2区 西壁断面模式図
図7	16-1 第1面平面図	図18	18-1	1区 第2面平面図
図8	16-1 第1面部分平面図 遺構断面図	図19	18-1	1区 第3面平面図
図9	16-1 第2面平面図	図20	18-1	1区 第3面 2流路縦断面図
図10	16-1 遺構・第2-2層、 第3層出土土器	図21	18-1	1区 第4面平面図
図11	16-1 第3層等出土土器(1)	図22	18-1	1区 2-3b層出土遺物

## 表目次

表1	16-1	遺物観察表	1	表4	16-1	遺物観察表	4
表2	16-1	遺物観察表	2	表5	16-1	遺物観察表	5
表3	16-1	遺物観察表	3	表6	18-1	遺物観察表	1

## 写真図版目次

写真図版1	川北遺跡 16-1	7. II区	東壁土層断面 (X = - 156,668 あたり) (西から)		
1.	II区	東壁土層断面 (北西から)			
2.	II区	東壁土層断面 (X = - 156,605 あたり) (北西から)	8. II区	東壁土層断面 (X = - 156,675 あたり) (北西から)	
3.	II区	東壁土層断面 (X = - 156,605 あたり) (北西から)	写真図版2	川北遺跡 16-1	
4.	II区	東壁土層断面 (X = - 156,615 あたり) (西から)	1.	I区	第1層除去面 (南西から)
5.	II区	東壁土層断面 (X = - 156,620 あたり) (西から)	2.	II区	第1面遺構検出状況 (南から)
6.	II区	東壁土層断面 (X = - 156,635 あたり) (西から)	3.	II区	2ピット断面 (西から)
			4.	II区	6溝断面 (西から)
			5.	II区	4・5ピット断面 (西から)
			6.	II区	4・5ピット完掘状況 (西から)
			7.	II区	1ピット完掘状況 (西から)

8. II区 3ピット完掘状況(西から)  
写真図版3 川北遺跡 16-1  
1. II区 第1面遺構検出状況(南西から)  
2. II区 第1面遺構検出状況(南から)  
3. II区 9ピット・10土坑断面(西から)  
4. II区 8ピット断面(西から)  
5. II区 7土坑断面(西から)  
6. II区 7土坑・8ピット完掘状況  
(西から)  
7. II区 18G-10a第2面検出状況  
(北西から)  
8. II区 18G-10g第2面検出状況  
(北西から)
- 写真図版4 川北遺跡 16-1  
土器(4、14、19、20、83、84)
- 写真図版5 川北遺跡 16-1  
土器(5、10、21、29、103)
- 写真図版6 川北遺跡 16-1  
土器(104、118、119、125、127、134)
- 写真図版7 川北遺跡 16-1  
土器(120、124、138、143、161)
- 写真図版8 川北遺跡 16-1  
土器(135、148、154、162、163)
- 写真図版9 川北遺跡 18-1  
1.1区 東西断面①(南東から)  
2.1区 東西断面②(南東から)  
3.1区 東西断面③(南東から)  
4.1区 東西断面④(南東から)  
5.1区 第3面 2流路縦断面(北東から)  
6.1区 第4面 足跡(南から)  
7.2区 完掘状況(北から)  
8.2区 西壁断面(東から)
- 写真図版10 川北遺跡 18-1  
1.1区 第2面全景(南東から)  
2.1区 第3面全景(東から)  
3.1区 第4面全景(東から)
- 写真図版11 川北遺跡 18-1  
上段(202~204、211~218)  
下段(205~210、219、220)

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

川北遺跡は藤井寺市川北1丁目・2丁目に所在する縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。

遺跡の発見は、大阪府立藤井寺養護学校（現：大阪府立藤井寺支援学校）建設に起因する。校舎の建設に伴い、大阪府教育委員会（現：大阪府教育庁）が昭和55年2月から3月にかけて試掘調査を行ったところ、用地内の一部で布留式期の遺構・遺物が検出されたことを受け、同年4月から7月に大阪府教育委員会による発掘調査が実施された。その結果、弥生時代中期の土器群や弥生時代後期の方形周溝墓・壺棺、古墳時代の竪穴建物・井戸などが検出された。

その後、大阪府立藤井寺支援学校の西側に位置する藤井寺ポンプ場内で、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所が進めているバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事が実施されることとなり、平成24年8月に大阪府教育委員会が試掘調査を行った。その結果、古墳時代から古代にかけての遺物が出土したことから、遺跡範囲が西側に拡張されることとなった。このため、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所より大阪府教育委員会に埋蔵文化財の発掘調査についての依頼が出され、同事業所に回答と公益財団法人大阪府文化財センター（以下、当センター）に調査実施の指示が出された。これを受けて平成25年2月に大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所と大阪府教育委員会、当センターの三者で覚書が締結された。

以降、この覚書に基づきバイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事の進捗に合わせる形で、藤井寺ポンプ場内での発掘調査が実施されることとなった。

平成25年4月から6月にかけて、川北遺跡（調査名：川北遺跡13-1）の発掘調査を実施し、埋

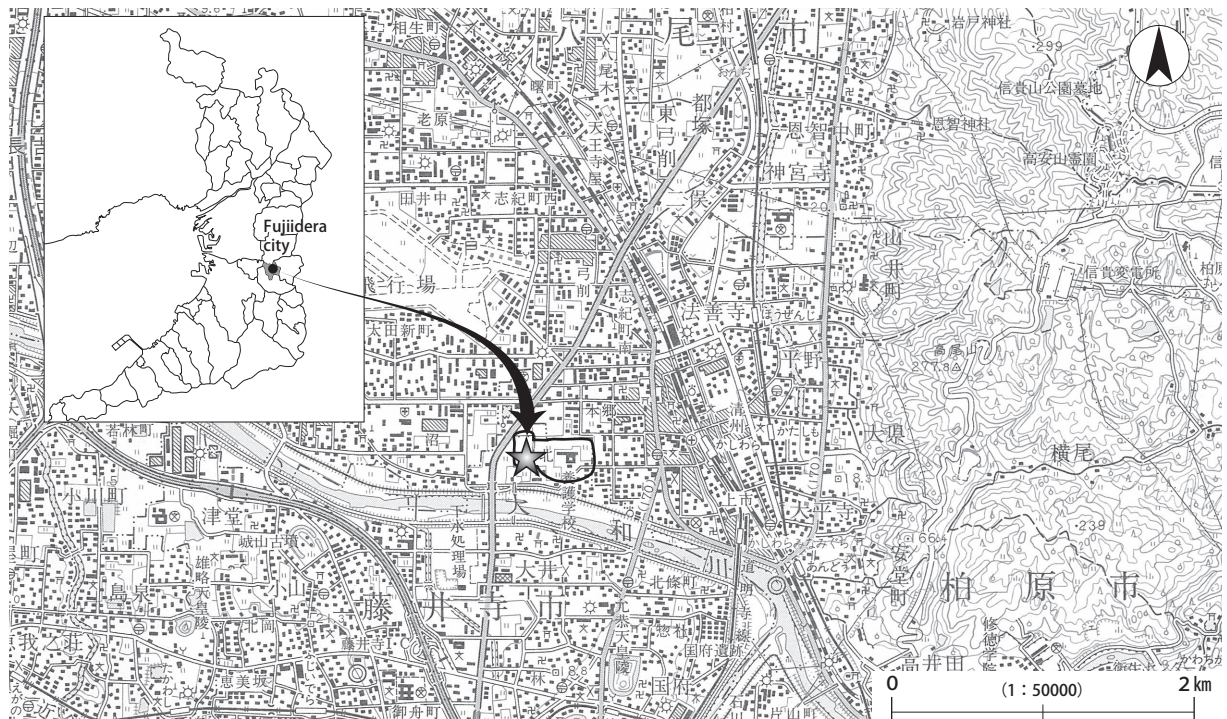


図1 調査地位置図

土に弥生時代から中世の遺物を含む旧河道と、古代から中世にかけての時期の水田面が検出された。本調査の成果については、平成25年12月に刊行した『川北遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第243集に収録している。

平成26年には既存の建物により削平を受けている可能性が高い部分の調査となったため、事前に大阪府教育委員会が2箇所の確認調査を行った。この結果、古墳時代から中世の遺物が出土したため、平成27年8月から9月にかけて川北遺跡(その2)(調査名:川北遺跡15-1)の発掘調査を実施した。これにより、古代から中世の、畦畔や耕作痕跡を伴う複数の水田面や、旧河道を検出した。本調査の成果については、平成28年2月に刊行した『川北遺跡2』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第264集に収録している。

本書収録の川北遺跡(その3)(調査名:川北遺跡16-1)調査は、文化財保護法99条に基づくもので、平成28年12月20日付けで大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所と当センターの間で平成29年1月4日から平成29年7月21日の委託契約を締結し、大阪府教育庁の指導のもと、当センターが発掘調査を行った。なお、委託期間は変更契約により平成29年1月4日から平成29年6月21日となっている。本調査は、平成27年度調査の1トレンチ(川北遺跡15-1 1トレンチ)から、平成25年度調査地(川北遺跡13-1)に向けてほぼ南北方向にのびる埋設管設置箇所である。調査成果の詳細は後述するが、埋土に縄文時代から中世にかけての遺物を含む旧河道、その上面に形成された遺構面と遺構を検出した。

同じく本書に収録している川北遺跡(その4)(調査名:川北遺跡18-1)の調査は、文化財保護法99条によるものである。平成30年7月2日から平成30年11月30日までの委託契約を平成30年6月22日付けで、大阪広域水道企業団事業管理部東部水道事業所と当センターの間で締結し、大阪府教育庁の指導のもと、当センターが発掘調査を行った。本調査は川北遺跡16-1の北側で、川北遺跡13-1と16-1の間の部分と、川北遺跡15-1の2トレンチの西で既設埋管との間の部分である。調査では、弥生時代から中世の遺物を含む旧河道と、その上部に形成された中世と考えられる2面の遺構面と流路2条を検出している。

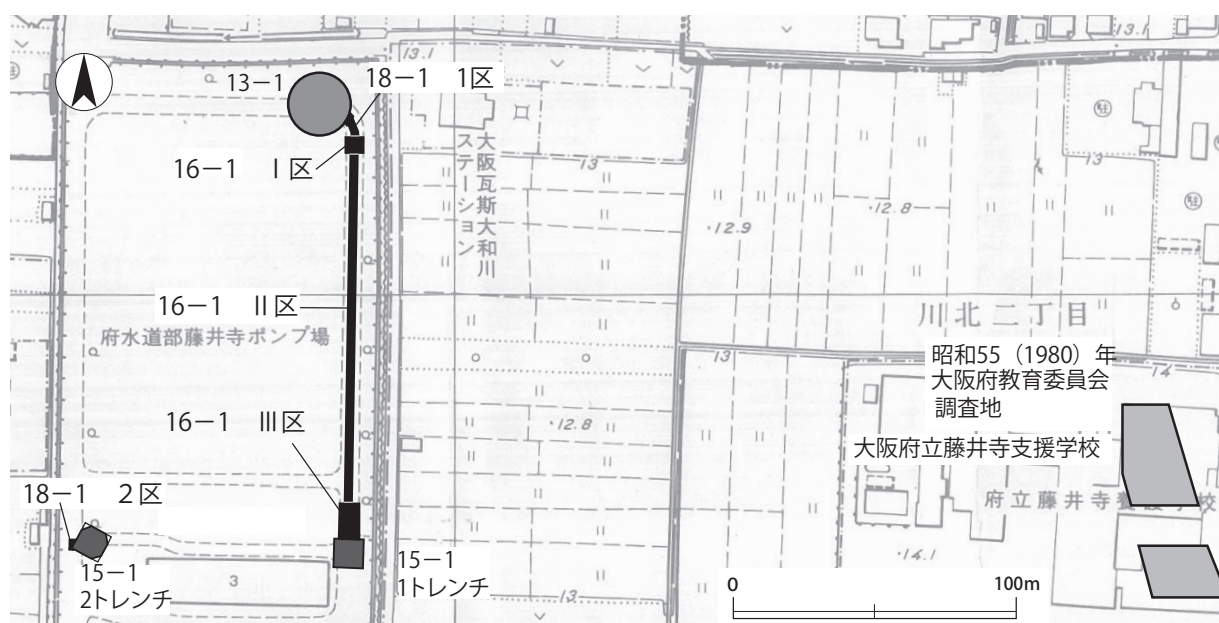


図2 調査区配置図

## 第2節 発掘調査・整理作業の経過

川北遺跡 16 - 1 は、藤井寺ポンプ場内の東端部に位置する。調査区は南北方向にのびる幅 3.6m、長さ 120m 強の細長いトレンチと、その両端にとりつく方形のトレンチで、面積は合わせて 569 m<sup>2</sup> である。掘削深度が地表下 4 m に達するため、鋼矢板を打設して側壁の崩落を防いだ後、約 2 m に達するポンプ場内建設時の盛土を機械で除去し、土留支保工を施して人力掘削に入った。平成 29 (2017) 年 1 月 4 日から人力掘削を開始し、Ⅲ区とⅠ区の調査を経て、Ⅱ区の調査を北から順に行った。人力掘削は地表面下約 4 m の深さまで行い、遺構面と遺構・遺物の検出に務めた。

発掘調査が終了した範囲を対象に、平成 29 年 1 月 12 日、2 月 2 日、3 月 2 日、3 月 23 日に大阪府教育庁の立会を受け、最終の立会をもって発掘調査を完了した。

川北遺跡 18 - 1 は、川北遺跡 16 - 1 のⅠ区と川北遺跡 13 - 1 の間の未調査部分と、川北遺跡 15 - 1 の 2 トレンチの西側で既設埋設管との間の未調査部分 (45 m<sup>2</sup> : 1 区 42 m<sup>2</sup>、2 区 3 m<sup>2</sup>) である。前者を 1 区、後者を 2 区と呼称している。調査は 1 区から行い、2 区の土留支保工と機械掘削が完了した時点で 1 区の調査を止め、2 区の調査を行う工程で実施した。なお、2 区は面積が狭小な上に大きく攪乱が及んでいたため、調査可能面積が 3 m<sup>2</sup> となり面的な調査が行えなかった。そのため、掘削時に遺物の収集と地層観察に努めた。

現地調査は平成 30 (2018) 年 7 月 2 日から 1 区の人掘削を開始し、7 月 24 日に大阪府教育庁の立会を受け、7 月 27 日に調査を終了した。2 区は 7 月 17 日から調査を行い、7 月 18 日に大阪府教育庁の立会を受け、調査完了の指示を受けた。

整理作業は 8 月 1 日から 8 月 31 日まで南部調査事務所で行い、川北遺跡 16 - 1 と 18 - 1 の調査成果を合わせた報告書の作成を行った。本事業は、11 月の『川北遺跡 3』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第 294 集の刊行・発送をもって完了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

川北遺跡は、藤井寺市の北端部に位置する川北1丁目・2丁目に所在する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。図3に示すように、現在は遺跡の南側を現大和川がほぼ東西方向に流れるが、これは宝永元（1704）年に付け替えられたものである。川北遺跡やその周辺に集落が形成された中世以前の景観に立ち返るためには、まず大和川付け替え前の地形と景観を想起しなければならない。

付け替え前の旧大和川は、その源流から亀の瀬を経て大阪平野にいたると、大阪の南半部を金剛山地の裾に沿うように南進してきた石川と合流したのち、北西へ流れ長瀬川と玉櫛川に分かれ北流する。川北遺跡とその東南側に接する船橋遺跡は、旧大和川と石川の合流部の西側に位置する。

大まかな地形分類からいえば、両遺跡の所在地は河川の堆積作用によって形成された沖積地に相当するが、旧大和川河床の傾斜変換部分に位置し、石川との合流部により近い船橋遺跡は、より活発な堆積作用を受けていたと考えられる。船橋遺跡が、自然堤防やシュートバーによって形成された微高地上に立地する遺跡であるのに対し、川北遺跡はそれらの河川の上流側からみると、その背後に広がる後背湿地上に位置するといえる。

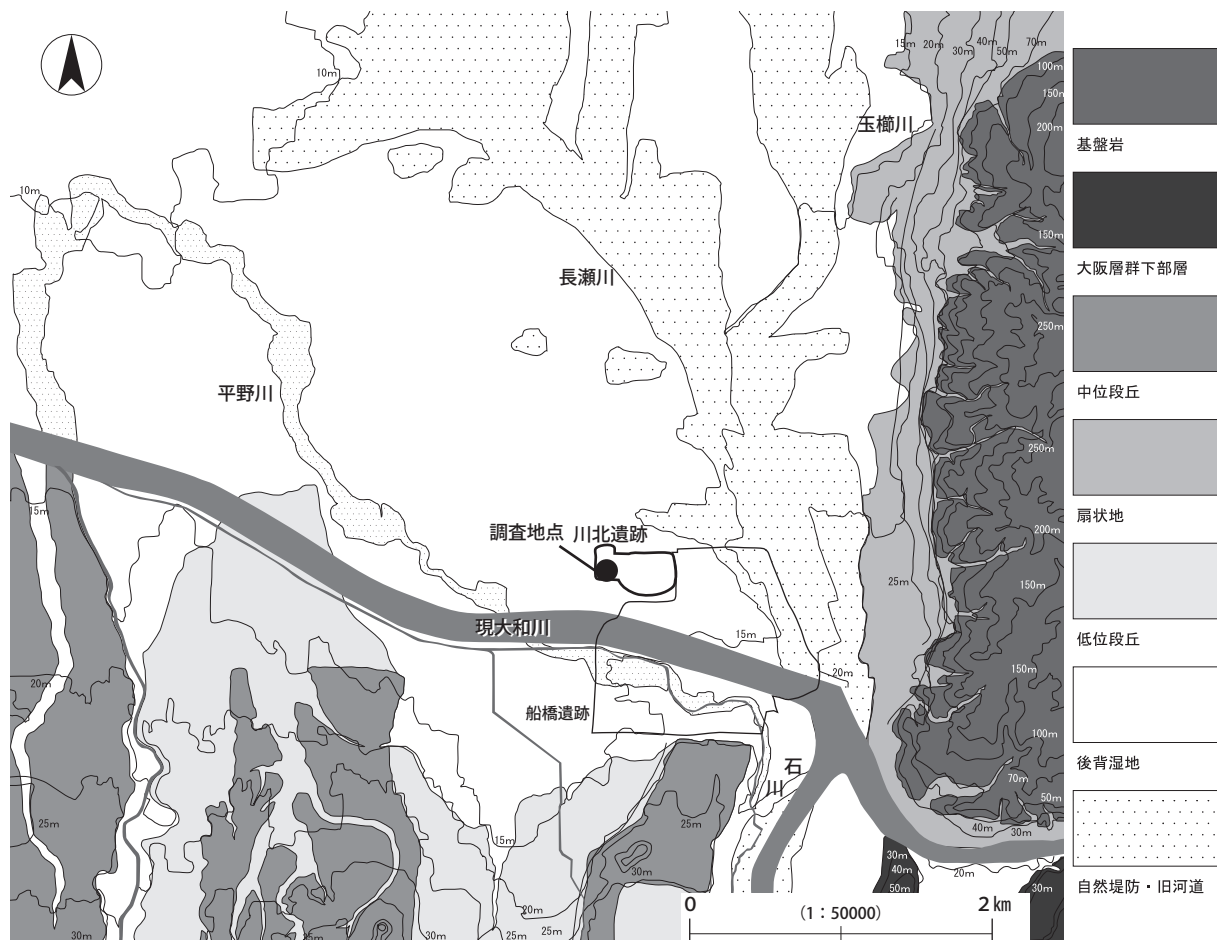


図3 周辺の地形環境図

堆積作用の活発な主要河川の流域の中でも、その合流部分である当該地域は、より活発な河川堆積の影響を受けていたと考えられる。字切図や、開発が本格化して地形改変が著しくなる前に作成された地形図や航空写真を援用し、中世以降の時期における当該地域の地形分類図が作成されているものの（井上 2014）、それをさかのぼる時期の地形に関しては解析が困難である。なぜなら中世をさかのぼる時期の微地形は、厚い堆積層に覆われており、地表面の観察のみではその痕跡をとらえにくいからである。加えて、大正飛行場の建設に伴い一帯が大規模に造成されたため、その部分に関しては近代の比較的早い時期に、かつての地形変化の痕跡が一掃されてしまったことも一因に挙げられる。

川北遺跡に関しては、既往の調査や今回の調査成果により、中世をさかのぼる時期に形成された河道と、それに近接する集落遺跡の存在をうかがうことができた。したがって地形分類図や地表面の観察ではうかがい知れない旧河道や微高地、および集落遺跡の存在を、断片的にはあるが発掘調査の成果からとらえることができる。なお、第 4 章第 2 節で詳述する川北遺跡で検出した旧河道は、その位置からみて旧石川の南東から北西方向に向かう分流から分岐したものととらえられる。

川北遺跡の東側に目を転じると、1 km ほど離れた位置に旧大和川の流路とそれが形成した自然堤防が広がり、さらにそれをこえると生駒山地の西側斜面および扇状地が広がる。南北に続くその扇状地上や斜面際には、河内六寺院として知られる古代寺院の存在が知られている。一方、川北遺跡の南東側に接する船橋遺跡では、古くから継続して発掘調査が行われている。当遺跡の周囲に展開するそれらの遺跡の動向も参考にしながら、川北遺跡における集落の動向を類推することも必要な手段と考える。

なお、調査地の標高は現地表面で T.P.+14.0m 前後でほぼ平坦だが、ポンプ場建設時の造成で 2.0m 前後の盛り土を施しているため、機械掘削終了面は T.P.+12.0m 前後であった。

## 第 2 節 歴史的環境

今回の調査では古代を中心に、縄文時代から中世まで、幅広い時期の遺物が出土した。古代の遺物の中には転用硯や漆加工に関連するとみられる土器など、特徴的なものも含まれている。ここでは集落の動態を中心に、川北遺跡を取り巻く地域の歴史的な環境をみとめる。

後期旧石器時代の遺跡には西大井遺跡や、国府型ナイフの標準遺跡である国府遺跡がある。縄文時代では国府遺跡で、前期の土器に伴って多くの埋葬人骨が検出されている。船橋遺跡では縄文晩期後葉の遺物包含層が広範囲に広がることが知られている。国府台地と、その北縁に連なるように南北にのびる自然堤防上が、古くから人々の生活域として利用されてきたことがうかがえる。

弥生時代前期から中期にかけては、船橋遺跡の現大和川左岸側で水田の広がりや中期の墓域が確認されている。川北遺跡の北側に位置する田井中遺跡では、弥生時代前期中段階にさかのぼる集落の存在が想定されている。また、国府遺跡でも弥生時代前期から後期の遺物が出土しており、周辺の沖積地とあわせて、弥生時代前期の段階から集落が点在していたことがうかがえるものの、その実態はまだあまり明確にはなっていない。当遺跡の北東方向に位置する大泉遺跡では、焼失住居とみられる後期後半の竪穴建物 1 棟などが検出されている。弥生時代中期には石川左岸の低位から中位段丘で集落が増える。それらの集落遺跡では素材や製作途中品を含む多量のサヌカイト石器が出土していることから、平野部への石器供給に大きな役割を果たしたと考えられている。川北遺跡でも、弥生時代の土器をしのぐ量のサヌカイト製打製石器や石器素材が出土している。このことから川北遺跡における石器出土地点周辺にお



いても、当該期の居住域が内包される可能性がある。石器生産に関わった集落に比較的近い立地から、それらの集落を介して石器素材を入手し、石器生産を行っていたと考えられる。弥生後期になると、石川左岸の低位から中位段丘上の集落が衰退し、それと前後して高地性集落が出現することが指摘されている。その一方で、川北遺跡では今回の調査地より南東側で、後期の方形周溝墓や土器棺墓が検出されている。本郷遺跡では弥生時代後期後半の溝が数条検出されており、その一つから小銅鐸が出土している。また船橋遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構や遺物が遺跡内の各地点で検出され、広範囲に集落域が展開していたとみられる。西大井遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に比定される土坑が 4000 基以上検出されている他、弥生時代後期～古墳時代前期に比定される水田、古墳時代前期の方形周溝墓・竪穴建物・井戸・溝が検出されている。このように、段丘縁辺部の沖積地においては、段丘域における集落の展開とはやや異なる状況がみられる。

古墳時代前期の遺構としては、川北遺跡における従来の調査で竪穴建物や井戸・土坑・溝が検出されている他、国府遺跡でも段丘崖の直下で住居が、また本郷遺跡でも当該期の井戸や方形周溝墓が検出されている。このことから当遺跡とその周辺では、古墳時代前期においては弥生時代後期から継続して、集落が営まれていた状況をうかがえるが、古墳時代中期から後期における集落の具体的なあり様は、現在のところ明確ではない。

7世紀になると、大和川と石川の流域を中心に古代寺院が密集して造営され、そのほとんどは古代の交通路沿いに立地する。船橋遺跡内でも大和川河床に礎石を伴う遺構が確認され、船橋廃寺と呼称されている。船橋廃寺に対しては、河内国府説や河内鑄銭司説、寺院説、<sup>えがのいち</sup>餌香市説など諸説が提示されている。

生駒山地南西麓に限ってみても、平野廃寺（三宅寺）や大泉廃寺（大里寺）、大泉南廃寺（山下寺）、



図4 周辺の遺跡分布図

太平寺廃寺（智識寺）、安堂廃寺（家原寺）、高井田廃寺（鳥坂寺）が後の東高野街道沿いに建立されていた。これらの古代寺院造営には、渡来系氏族が関与した可能性が指摘されている。河内国府については諸説があり、はざみ山遺跡、船橋遺跡、国府遺跡などが候補に挙げられているが、結論をみていない。

平安時代には西大井遺跡で条里型水田が検出されている他、船橋遺跡では複数の掘立柱建物からなる屋敷地や、井戸・溝が検出されている。ただ、前時代に比べて顕著な遺構は減少する傾向にある。

## 第3章 調査の方法

### 第1節 現地調査

発掘調査に当たっては、基本的に『遺跡調査基本マニュアル』（大阪府文化財センター 2010）に基づいて実施した。

地区割りは、世界測地系に準拠した平面直角座標系第VI系を使用した地区割りを行い、遺物の取り上げや遺構図作成の基準として用いた（図5）。まず、地区割りの第I区画は大阪府の南西端  $X = -192,000$  m・ $Y = -88,000$  mを基準とし、大阪府内を縦6 km、横8 kmで区画し、縦軸をA～O、横0～8として、縦・横の順で表示する。第II区画は第I区画内を縦1.5 km、横2.0 kmで縦横それぞれ4分割して、計16区画を設定する。第III区画は第II区画内を100 m単位で区画し、縦を15分割、横を20分割する。そして、北東端を起点にして縦a～j、横1～10とし、横・縦の順で表示する。これに準じると今回の調査地の第I・II区画上の位置はF 16 - 15となる。遺物の取り上げなどは第IV区画を単位として行き、ラベルや登録台帳には第III・IV区画のみを記載している。

水準は、国土の基準となっている東京湾平均海面を用いた。

川北遺跡 16 - 1 は、トレンチの形状を単位として三つに区分し、北からI区・II区・III区とした。最初にIII区の調査を行い、その後はI区・II区の順番で、北から調査を進めた。

川北遺跡 18 - 1 では、16 - 1 と 13 - 1 の間の調査区を1区、15 - 1 2 トレンチの西側の調査区を2区とした。

調査では、盛土および現代耕作土を機械掘削で除去後、順次、人力掘削を行い、遺構面および遺構の検出を行った。

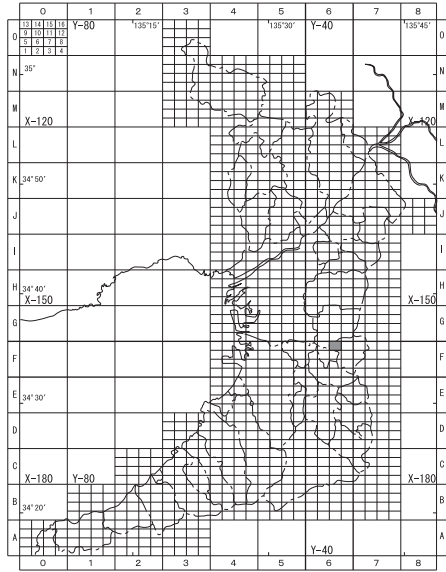
出土した遺物は、遺跡名・地区名・層名・遺構名・出土年月日・登録番号を記したセンター所定のマイラーベースのラベルを添付し、遺構、包含層ごとに適宜取り上げた。

遺構番号は、種類にかかわらず通し番号を付しており、「6溝」のように「番号-遺構種類」という形で記載した。各遺構面の測量に関しては、基本的に縮尺100分の1で、個別の遺構図や断面図は縮尺20分の1で作成した。

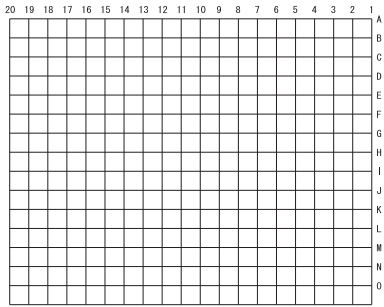
層序を観察するために、16 - 1 では調査区の東辺に並行するように土層観察用断面を設定し、その西側を土層ごとに順次掘り下げて遺構面の検出に努めた。ただし、III区に関しては、ポンプ場造成時の攪乱により自然堆積層が残っていなかったため、土層断面は設定しなかった。18 - 1 の1区では調査のほぼ中央に東西方向の断面を、2区では調査区西側の壁を観察用の断面とした。土層断面にて層序の堆積状況を観察・分層した後は、写真撮影と縮尺20分の1の断面実測を行った。

各遺構面および土層断面や遺構の検出状況・断面・完掘状況などは、35 mmカメラ・6×7カメラ・デジタルカメラで適宜撮影を行った。

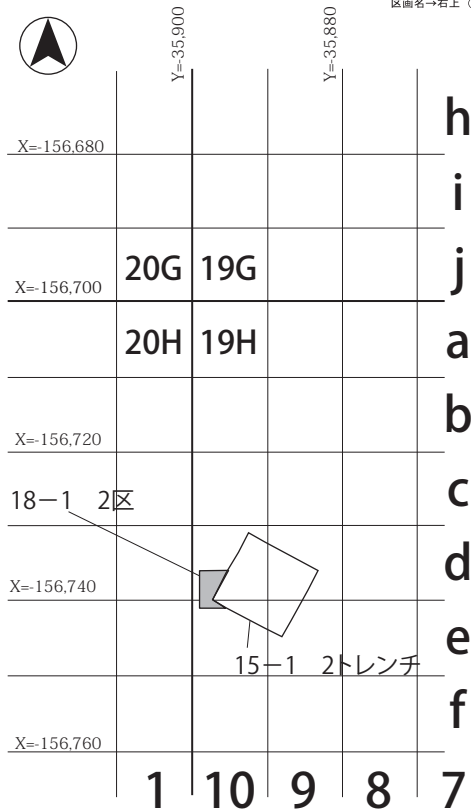
現地調査と併行して、現場詰所において土器の洗浄と乾燥・注記・遺物登録・写真整理などの作業を行った。



第Ⅰ・Ⅱ区画



第Ⅲ区画



第Ⅳ区画

区画名→右上(北東)隅のポイント

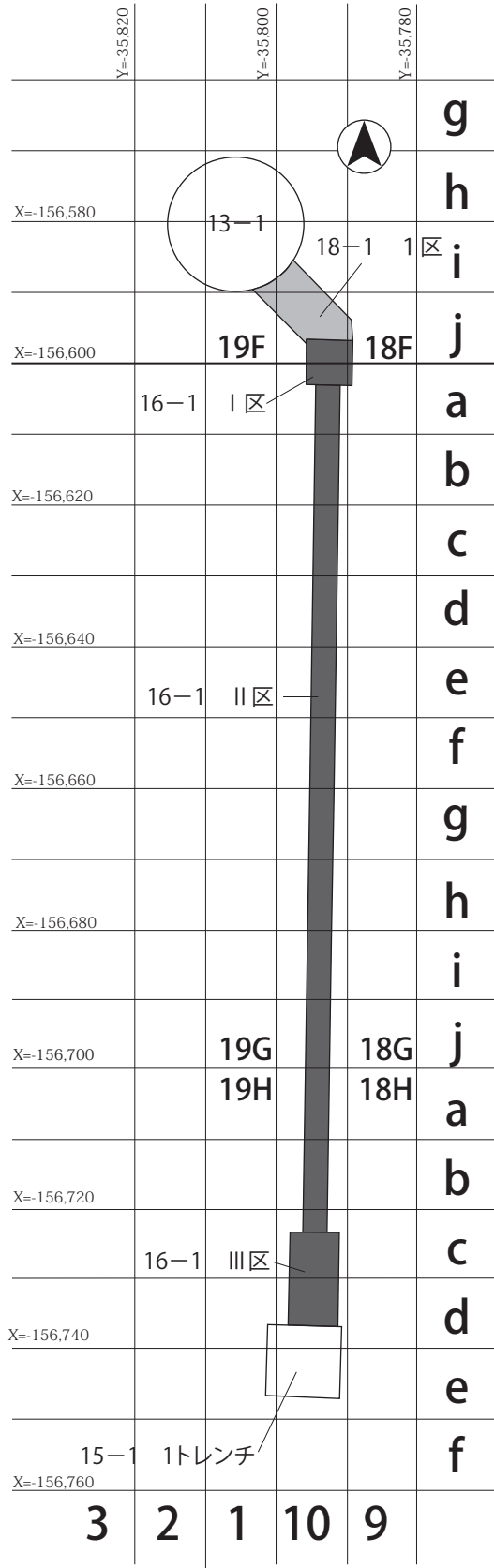


図5 地区割り図

## 第2節 整理作業

川北遺跡 16－1 の発掘調査では、土器・土製品・石器などあわせてコンテナパッド(60×40×15 cm) 11 箱、川北遺跡 18－1 は面積が狭小のため 16－1 に比して遺物出土量が少なく、4 箱の遺物が出土している。これらの遺物を整理し、その成果と発掘調査の成果をあわせ、発掘調査報告書の作成を行った。

川北遺跡 16－1 において発掘調査で出土した遺物は、細かい破片になったものが大半を占めるため、遺構出土遺物・第2－2層出土遺物を中心に接合作業を行った。遺物の抽出は、遺跡や遺構の時期・性格など判断材料となる特徴を有する遺物を対象に行った。

川北遺跡 18－1 は、土壌層を3層以上検出しているが遺物の出土量が少なく、3－2b層とした氾濫堆積物から出土した遺物を中心に整理作業を行った。

抽出した遺物は、川北遺跡 16－1 で 201 点、川北遺跡 18－1 調査区で 19 点である。実測・拓本・法量の計測などの方法を用いて、その特徴を記録する必要を認めたものである。実測にあたり、土器のほとんどは破片だったため、図上で大きさや器形がわかるものは復原実測を行っている。実測または写真撮影を行った遺物については、遺物掲載台帳および実測遺物台帳を作成している。作成した実測図は、スキャナーでパソコンに取り込んだのち、Adobe 社の Illustrator C S 6 を用いてトレースを行い、掲載遺物として挿図を作成した。

遺構図・断面図など、現場で取得した図面類については、原図をスキャナーでパソコンに取り込んだのち、Adobe 社の Illustrator C S 6 を用いてトレースを行い挿図を作成した。

現場で撮影した遺構や断面などの写真は、報告書掲載分を選択し、写真室においてデジタル化を行った。

掲載遺物については、写真室において写真撮影を行い、デジタル化を行った。

以上の様にデジタル化を行った報告書掲載遺物実測図・写真・遺構図・断面図などは、諸作業と並行して作成した報告書掲載文章や表などとあわせ、Adobe 社の InDesign 6 を用いて編集を行い、報告書印刷データを作成した。

また、出土遺物については、調査毎の報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、収納している。図面・写真などの記録類も、調査毎に整理・収納を行った。

## 第4章 16 - 1 の調査成果

### 第1節 基本層序

本調査区では近代の盛土より下位の土層を4層に大別した。

**第1層**：北に向かって徐々に層厚が薄くなる傾向がみられ、厚い部分では下部に第2層に似たシルトブロックが混入する。砂礫が上方に向かって大きくなる傾向がみられることから、洪水堆積層の可能性はある。層中に土師器の細片が若干含まれていたが、それらの時期を特定することは難しい。ただ、明らかに近世のものと考えられる遺物は含まれなかった。

**第2層**：上部が弱く土壌化しており、その上面に踏み込みの痕跡が認められた。旧河道の本流部分が若干逸れて、河道の本流から離れた時に堆積したか、さらに流路が遠のいて後背湿地となった際に形成された土壌と考えられ、耕作土ではない。畦畔なども検出しなかったが、面的な残存範囲が極めて限られていたこともあり、確実になかったとも断定することができない状況である。

最下層に遺物を比較的多量に含む土壌層が部分的に含まれているのを認めた。したがってこの土壌層を第2-2層とし、前述の弱い土壌層を第2-1層と細別した。第2-1層に含まれていた遺物は微量で、瓦・須恵器・土師器・黒色土器などの細片が10点強出土したにとどまる。

それに対して、第2-2層には、器形復原が可能な土師器・黒色土器などが含まれていた。

**第3層**：旧河道に堆積した砂層である。河道は数時期にわたるものが切り合っている。全体的にみると第3層の砂礫は上方に向けて細粒化し、最上層に極細砂から細砂の堆積が認められる傾向があったが、別の流路が切り込んでいる部分では上層まで中砂から粗砂が堆積していた。

ラミナの方向や河道の断面形状などから、トレンチの長軸方向に並行するように流れていたものが埋積した後に、斜交するような流れのあったことがうかがえる。次節で詳述するが、遺構や遺物の検出状況などから、複数の河道が切り合う現象は、7世紀から14世紀にかけての時期にみられたと考える。

最上層の極細砂から細砂には、若干土壌化している部分があった。それは河道が埋積した後、地表面に形成された土壌層とみられ、それが残存する範囲においてその上面で第1面を検出した。

遺物の出土は、この層に含まれていたものが最も多く、細片で割れ口が磨滅して丸みを帯びているものも含まれるが、あまり磨滅がみられないものも含まれていた。このことから第3層出土遺物には、河川の土砂運搬作用に伴って、離れた場所から流されてきたものの他に、流路の貫入に伴って、至近な場所に形成されていた遺物包含層から洗い出されたものも含まれていると考える。

**第4層**：シルトから極細砂で構成されており、掘削限界まで掘り下げたが、確実にこの層に含まれるとみられる遺物は検出しなかった。第4層は掘削限界より下位におよんでいる。土壌化は認められず、沼状の湿地に形成された止水性堆積層ではないかと考える。

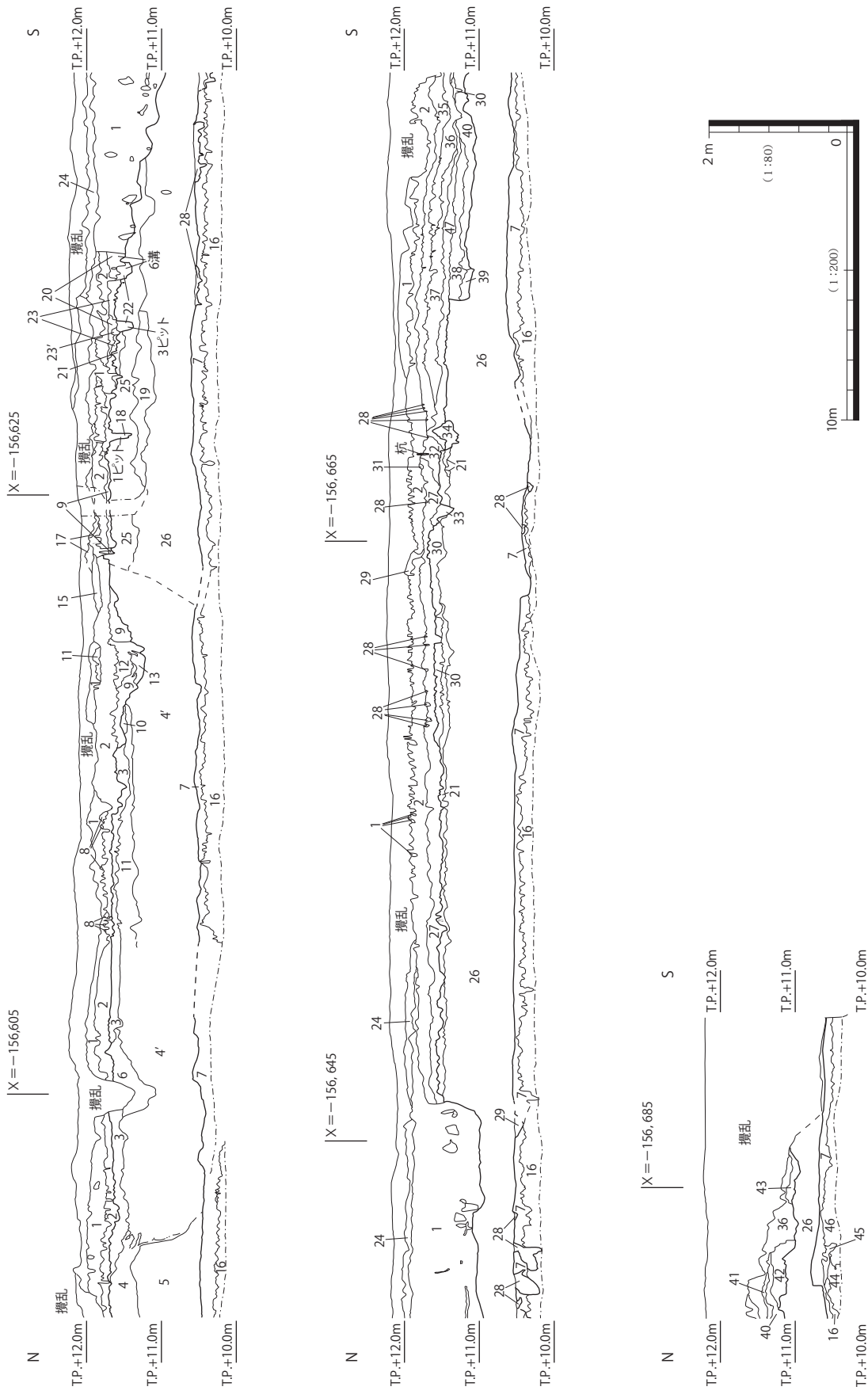


図6 16-1 東壁観察用断面図

## 16 - 1 東壁観察用断面図土色注記

- 1 10 Y R 5/1 灰白色 中砂～小礫  
(径3cm大の円礫混じる。上方細粒化する。2に似た径10cm程度のシルトブロック含む) [第1層]
- 2 2.5 Y 5/1 黄灰色 シルト混極細砂(上面に踏込と生痕跡あり) [第2-1層]
- 3 2.5 Y 6/1 黄灰色 シルト混細砂(若干土壌化している) [第2-1層]
- 4 10 Y 6/1 灰色 極細砂と5 Y 7/1 灰白色 細砂が互層に堆積(自然堤防状の堆積) [第3層]
- 4' 2.5 Y 7/1 灰白色 細砂～粗砂(上方細粒化しつつ、側方細粒化、旧河道埋土) [第3層]
- 5 5 Y 7/1 灰白色 中～粗砂と7.5 Y 5/1 灰色 シルト混細砂が層状に堆積する  
(上方細粒化する層の単位が無数にあり、旧河川埋土とみられる。4'に似る) [第3層]
- 6 2.5 Y 5/1 黄灰色 シルト混細砂と2.5 Y 6/2 灰黄色 細砂混中砂がブロック状に混じる。 [第2-2層]
- 7 2.5 Y 4/1 黄灰色 極細砂混シルト(極細砂ブロックと微小な炭化物粒、若干のマンガン斑紋含む) [第4層]
- 8 10 Y 7/1 灰白色 シルト混極細砂(第2-1層上部に形成された土壌層か?)
- 9 7.5 Y 5/1 灰色 細砂混粘質極細砂 [第2-1層]
- 10 10 Y R 5/1 褐灰色 礫混粘質細～中砂(径3cm以下の円礫含む) [第3層]
- 11 2.5 Y 7/2 灰黄色 細～中砂 不明瞭ながらラミナあり [第3層]
- 12 2.5 Y 6/2 灰黄色 極細～細砂(わずかに土壌化する)
- 13 10 Y R 7/1 灰白色 極細砂混粘質細砂
- 14 2.5 Y 5/1 黄灰色 シルト混砂質粗砂 [第1層] か
- 15 5 P B 6/1 青灰色 極細砂混粘質細砂 [第1層] か
- 16 10 Y R 5/3 にぶい黄褐色 中砂混シルト(7層に似るが、それより土壌化弱い。酸化鉄斑紋含む) [第4層]
- 17 2.5 Y 6/1 黄灰色 極細砂混シルトと2.5 Y 7/1 灰白色細砂が互層をなす。 [第1層]
- 18 10 Y R 6/1 褐灰色 シルト混細砂(2と第3層が混ざりあった状態) [第2-2層]
- 19 10 Y R 8/3 浅黄橙色 円礫混細～中砂(ラミナあり) [第3層]
- 20 N 4/1 灰色 細砂混粘質シルト  
(2.5 Y 7/3 浅黄色 細砂ブロックとN 6/0 灰色 シルトブロック、炭化物混じる) [第2-2層]
- 21 2.5 Y 6/1 黄灰色 細砂混極細砂(11に似るが、若干土壌化している。  
堆積作用がおさまった間に旧地表面に形成された土壌層か?) [第2-2層]
- 22 5 Y 5/1 灰色 細砂混極細砂(20に似たシルトブロックが混入する。炭化物、土器含む) [第2-2層] 土器多い
- 23 5 Y 6/1 灰色 細砂混極細砂(シルトブロック、炭化物が多く混入する) [第2-2層] 土器多い
- 23' 5 Y 5/1 灰色 細砂混極細砂(23に似るがそれより炭化物が多く、黒色化している) [第2-2層] 土器多い
- 24 5 Y 5/1 灰色 シルト混粘質細～中砂(若干土壌化しているが、耕作土層かどうかは不明) [第1層]  
暗灰黄色 極細砂混砂質中砂(若干土壌化している。径1cm前後の円礫含む) [第1層]
- 25 10 Y R 8/3 浅黄橙色 中砂混細砂(径3cm以下の円礫含む。ラミナあり) [第3層]
- 26 10 Y R 8/2 灰白色 粗砂～礫混細砂～中砂(南ほど粗砂～礫の含有量が多くなる) [第3層]
- 27 2.5 Y 4/1 黄灰色 シルト混粘質細砂  
(炭化物粒、遺物を含む。23に似るがそれより粘性強く、炭化物の含有量が少ない) [第2-2層]
- 28 5 Y 7/1 灰白色 粘質極細砂 [第2-1層]
- 29 10 Y 5/1 灰色 シルト混粘質細砂(10 Y 7/1 灰白色 粗砂混粘質細砂ブロック含む)
- 30 5 Y 6/1 灰色 シルト混粘質極細砂(27に似るがそれより土壌化弱い)
- 31 10 Y 7/1 灰白色 シルト混粘質細砂
- 32 7.5 Y 6/1 灰色 シルト混粘質細砂(わずかに炭化物含む)
- 33 7.5 Y 4/1 灰色 シルト混粘質細～中砂
- 34 2.5 Y 5/1 黄灰色 シルト混粘質細砂(第3層の土がブロック状に混入する)
- 35 10 Y R 5/1 褐灰色 シルト混粘質極細砂  
(2に似るがそれよりやや粘性が強い。最下部に2.5 Y 5/1 黄灰色 極細砂ブロックが混じる)
- 36 10 Y R 5/1 褐灰色 極細砂混シルト
- 37 2.5 Y 5/1 黄灰色 極細砂混粘質シルト
- 38 2.5 Y 7/1 灰白色 シルト混砂質極細砂と10 Y R 6/1 褐灰色 シルト混粘質極細砂が混じる
- 39 10 Y R 5/1 褐灰色 極細砂～細砂(若干ラミナあり。上方粗粒化する)
- 40 10 Y R 6/1 褐灰色 極細砂～10 Y R 7/1 灰白色 細砂(上方粗粒化する。ラミナあり)
- 41 10 Y R 5/1 褐灰色 極細砂混粘質シルト
- 42 5 Y 6/1 灰色 シルト～極細砂(植物遺体含む)と7.5 Y 7/1 灰白色 細～中砂が互層をなす
- 43 10 Y 6/1 灰色 極細砂混粘質シルト(止水性堆積層に似るが、若干土壌化する)
- 44 5 Y 6/1 灰色 細砂混極細砂(腐食した植物遺体が若干混る。10 Y R 5/1 褐灰色 極細砂混シルトブロック含む)
- 45 5 Y 5/1 灰色 極細砂混細砂(44に似るがそれより若干粘性が強く腐食した植物遺体の含有量も多い)
- 46 2.5 Y 5/1 黄灰色 極細砂混粘質シルト(10 G Y 7/1 明緑灰色 極細ブロック、ひしの実等の植物遺体、炭化物含む)
- 47 10 Y R 5/1 褐灰色 細砂混粘質極細砂(若干遺物が混る)



なお、今回の調査で検出した旧河道は、川北遺跡 13－1 と 15－1 調査でも検出されている。しかし、それらの調査を通じてもその河道の肩部は明確にはとらえていない。13－1 調査成果を収録している『川北遺跡』第 243 集では、川北遺跡で検出される旧河道を、船橋遺跡の平成 8 年度（1996）および平成 13 年度（2001）に行われた調査で検出された古代末から中世前期の遺物を含む、幅 130 m 以上の流路の延長線上にあるとみて、同一の流路の可能性が指摘されている。井上智博氏は、別所秀高氏が現大和川に切られた沖積リッジは、羽曳野市碓井付近で石川から分岐する分流路の痕跡であることを指摘している点をふまえ、明治 19（1886）年の地籍図にみられる条里地割りの乱れを参考に、その分流路の復原を試みた。それにより、空中写真ではその痕跡を判読できないものの、川北遺跡で検出されている流路は、南東から北西方向に流れる石川の分流路から分岐したものと推定する。これによると、その上流に船橋遺跡が位置することとなることから、本書も別所氏・井上氏の所見に従いたい。

## 第2節 検出遺構と遺物

2枚の遺構面を検出した。上から1枚目の遺構面は旧河道の埋土のうち、流水作用が活発だったときに形成された第3層の堆積活動が一旦収まった後、その上面に形成された生活面である。2枚目の遺構面は旧河道の堆積層を除去した段階で検出した面である。この面では人為的に形成された遺構は検出なかったが、偶蹄目の動物の足跡を多数検出した。

### a. 遺構の検出状況

#### ・第1面

第2-1層ないし第2-2層を除去した段階で検出した遺構面で、第3層の最上層に部分的に残存する土壤層を基盤層とする。第3層は旧河道の埋土であることから、第1面は旧河道が埋積した後、微高地に形成された集落の居住域と考えられる。ただこの遺構面で検出された遺構には切り合い関係はなく、遺構密度は低い。別の河道や第1層・第2層によって削平・浸食されており、第1面の検出範囲は部分的であった。加えて、ポンプ場の造成時に大きく削平されており、調査区の南寄りの部分では第1面の存在を確認することはできなかった。

遺構面はⅡ区の中央部分の2箇所において島状に検出した。もとは一つの広がり呈していたとみられるが、新しく貫入した河道や洪水堆積層に分断され、部分的に残ったものと考えられる。標高は北から南にむけて僅かに下降するものの、ほぼ平坦である。柱穴・土坑・ピット・溝などを検出した。

第1面検出遺構のうち1・2・3ピットはほぼ等間隔に南北に並んでおり、掘立柱建物もしくは柵列の痕跡の可能性がある。2ピットには柱根が残存していた。6溝はそれらの柱穴列の南側に、東西方向にのびていた可能性がある。1ピットから3ピットを伴う構造物の南側を限っていた可能性があるが、検出範囲が限られているため確定はできない。1ピットから4ピットは20～30cmの深さがあったが、それ以外のピットは10cm弱と極めて浅かった。7土坑は全体を検出することはできなかったが、直径1m弱の大きさともみられる。深さは20cm強で、底部付近でほぼ完形の土師器皿を検出した。

1ピットからは図10-11の他に、杯もしくは皿を含む土師器片が5点出土している。2ピットからは土師器と瓦器の破片が各1点出土した。3ピットからは黒色土器片1点・土師器片16点、煮沸具とみられる土師器片2点、製塩土器の可能性のある破片2点が出土した。4ピットからは黒色土器片1点・土師器片2点・煮沸具とみられる土師器片5点、須恵器片2点、木片1点を出土した。1ピットから4ピットの出土遺物は点数こそ多いものの、細片だったため、図示しえたのは1点だった。それらの遺物は、ピットが埋没する過程で混入したものと考えられる。6溝からは図10-1～9の他に煮沸具とみられる土師器の破片などが出土した。7土坑からは図10-10の他、土師器片5点・黒色土器片1点が出土した。図化しなかった遺物はいずれも細片である。

次節で詳述するが、第1面検出遺構は10世紀から11世紀の時期に形成され、機能した可能性が高い。

さらにこの遺構面を覆う第2-2層出土遺物の中に14世紀の遺物が含まれることから、その時期までこのあたりが集落の居住域に含まれていた可能性がある。

#### ・第2面

第3層を除去した段階で検出した面である。第3層堆積の契機となった旧河道の形成前の景観を知ることができる。第2面の基盤層である第4層は、湿地の堆積層とみられる。

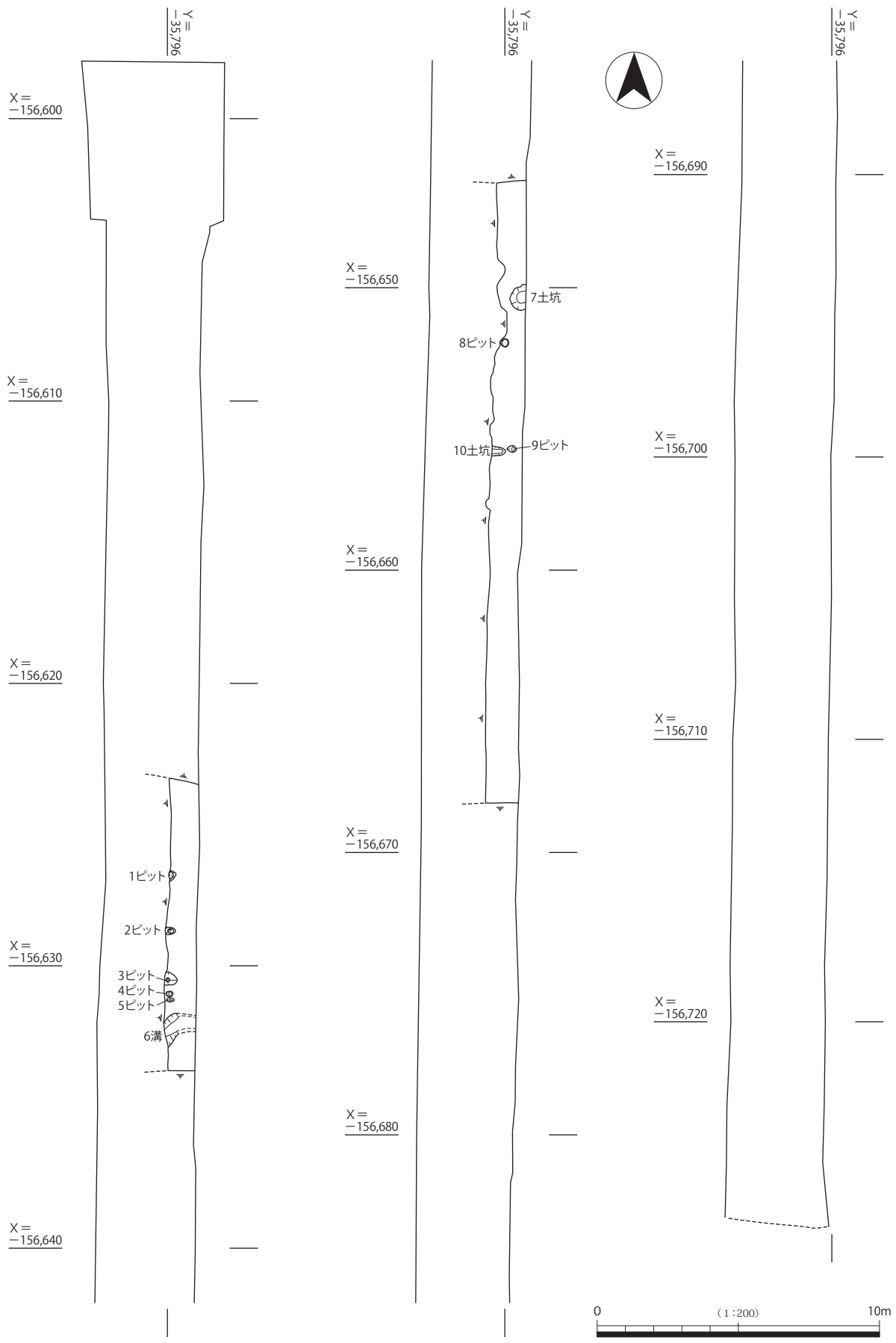


図7 16-1 第1面平面図

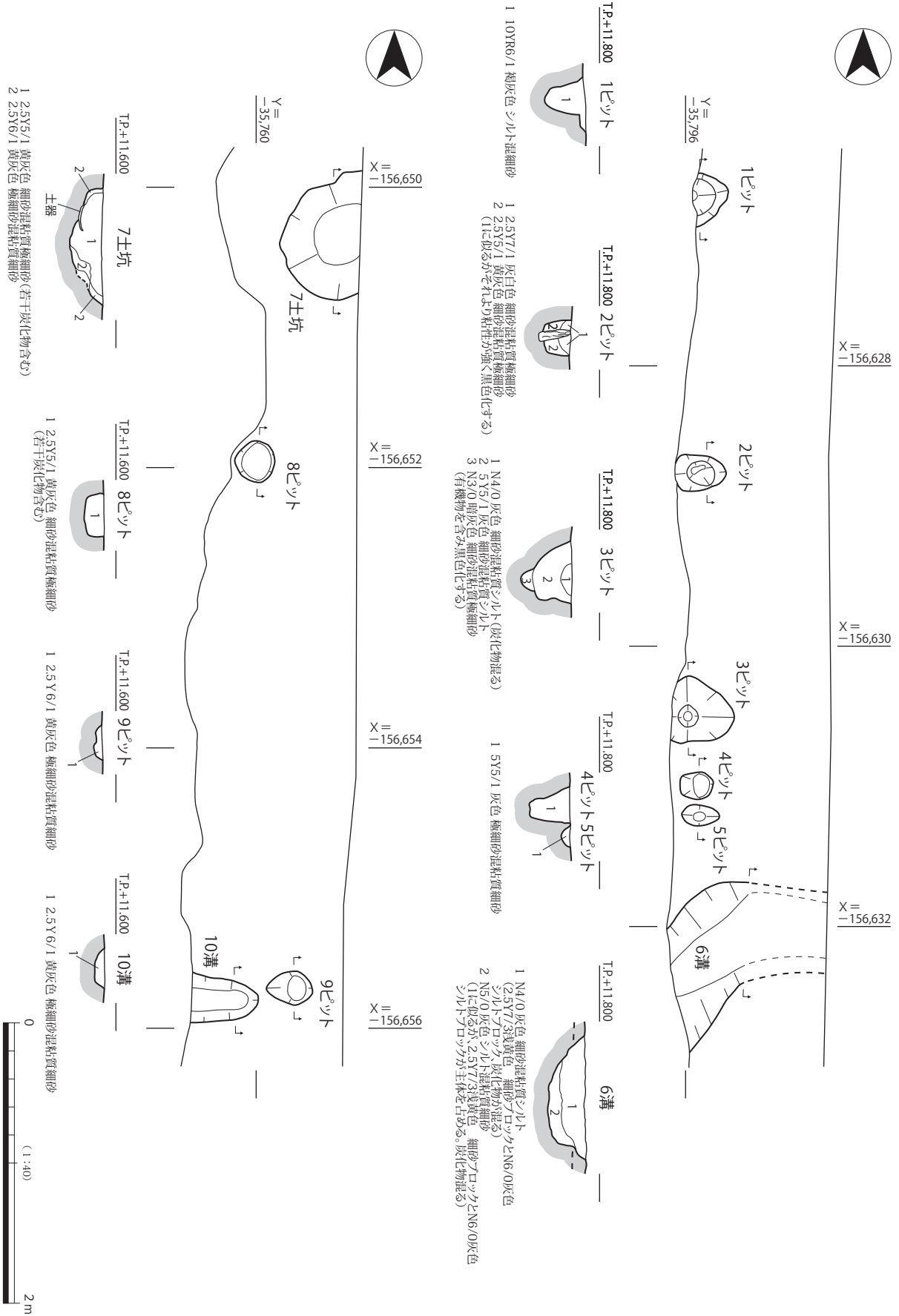


図8 16-1 第1面部分平面図 遺構断面図



図9 16-1 第2面平面図

前述したようにこの遺構面では、おそらくは牛と思われる偶蹄目の動物の足跡と微地形の変化を検出したが、人為的な遺構は検出しなかった。限られた検出範囲での観察なので断定はできないが、牛の足跡は調査区を東西方向に横断するように分布している。第2面から掘削限界高まで掘削したが、第4層に含まれる遺物を検出しなかった。このように第2面の調査では人の活動痕跡を捉えることが難しい。ただ、ほぼ同じ方向で調査区を横切るように牛の足跡を複数個所で検出したことは、人に連れられて牛がそのあたりを往来したことをうかがわせる。もしそうであれば、それは物の運搬や、田畑を耕すために用いられていた牛が往来したことによると考えられる。このような状況から、当時の一帯は集落域の縁辺部か、居住域と生産域の間に広がっていた空閑地だったのではないかと推測する。

第2面が広がっていた時期は、第3層出土遺物や第1面検出遺構の推定時期により、10世紀を下限とし、おそらくはそれをさかのぼる時期ということが出来る。これに関しての詳細は後述する。

## b. 遺物の出土状況と時期

埋土中から遺物が出土した遺構には、1ピット・2ピット・3ピット・4ピット・6溝・7土坑がある。出土遺物には細片が多く、ほぼ完形の遺物が出土したのは7土坑のみだった。これらのうち、図化可能なものを最大限抽出し、6溝・7土坑と1ピット出土遺物を図示した(図10-1~11)。

6溝からは黒色土器碗(図10-1~5)、土師器碗(図10-6~9)などが出土している。黒色土器碗は2がB類、それ以外はA類である。1は口縁端部に、上方から垂直方向に工具を押し当ててつけたような沈線が1条付されている。体部外面は磨滅のため調整が不明確である。2は口縁部内面に1条の凹線を付している。内外面とも丁寧なヘラミガキにより光沢を帯びるが、外面は上半部が煤に覆われておりヘラミガキが不明瞭である。3は口縁端部からやや下がった内面に浅い凹線を1条めぐらせる。内外面ともヘラミガキを施すが、それほど密ではなく、やや雑な印象を受ける。4の高台は薄くて高さがあり「ハ」字状に開く。底部のみが残存するが、全体に薄く丁寧に作られており、高台の接合痕はきれいに消されている。5も底部のみで、全体にやや小ぶりの印象を受ける。底部外面の高台に囲まれた部分に文字が書かれていたとみられるが、大部分を欠損しているため内容は不明である。これらの黒色土器は、2が11世紀に属するとみられる以外はおおむね10世紀に含まれるのではないかと考える。

6~9はいずれも体部外面にユビオサエの痕跡が顕著に残り、8・9は内面にもユビオサエが残る。7は他の土師器碗に比べて口径・器高が上回るものの、体部を外方に直線的に立ち上げ、口縁部で強いヨコナデを施して屈曲させるという形態的な特徴が、他の土師器碗と類似している。それらは全体に薄い、きめの細かい粘土を用いてしっかりと焼成されており、中世末葉にみられる「ヘソ皿」とは明らかに異なる印象を受ける。古代の河内地域で類例が認められるが、大量に流通しているものではないので時期判断が難しい。10世紀代のものである可能性を指摘しておきたい。このようにみると、6溝出土遺物はおおむね10~11世紀の時期に含まれるのではないかと考える。

図10-10の土師器碗は口縁が全体に若干ひずんでやや楕円気味である。体部外面にユビオサエがみられるが、底部から体部にかけての立ち上がり丸みを帯び、口縁部の屈曲も緩やかである。器壁も6~9に比べるとやや厚い。口縁部が一部打ち欠かれ、その破面が磨滅して丸まっている。そしてその周囲は煤が付着して黒色化していたことから、灯明皿として使用されたと考えられる。打ち欠かれて縁がくぼんだ所に灯心を置いたのだろう。11世紀のものともみられる。

図10-11の土師器皿は体部外面にユビオサエがみられ、口縁部外面にはヨコナデが施される。残存部が限られており、時期判断の決め手に欠けるが、6~9よりは時期が下るのではないかと考える。

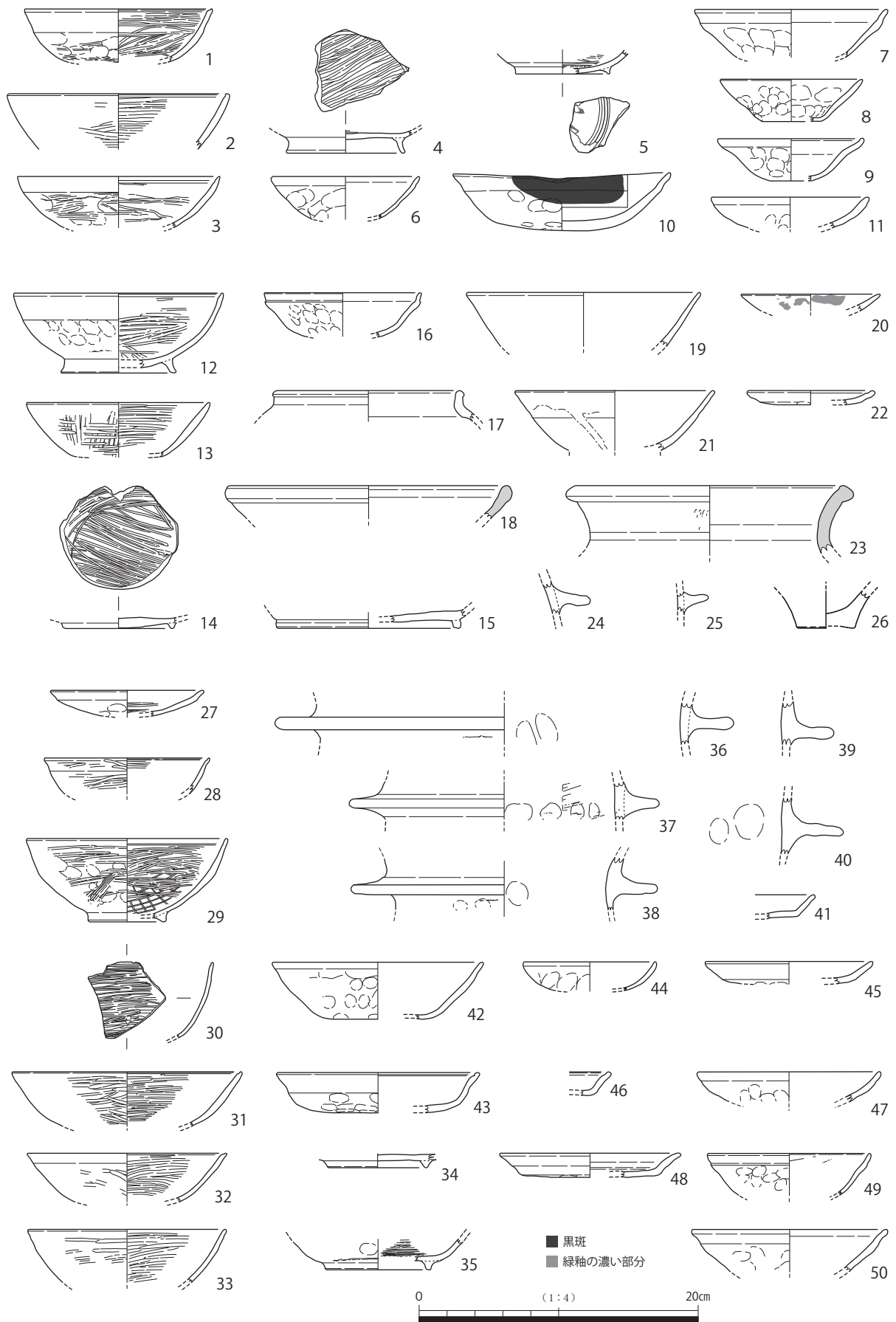


図10 16-1 遺構・第2-2層、第3層出土土器

第2-1層は土壌の粒度が細かいことから、旧河道の中心部分が当調査地より離れた場所に移動した際、河道の側方に堆積した土壌とみられる。第2-1層から出土した遺物は極めて微量で、瓦・土師器・須恵器・黒色土器片が10数点出土したのみである。いずれも細片で図示できるものはなかった。

第2-2層はおおむね第1面の検出範囲で、遺構面を覆うように分布しており、第1面が生活面として機能していた際に形成された遺物包含層の可能性もある。第2-2層の出土遺物には、図10の黒色土器椀(12~15)、土師器椀(16)、土師器甕(17)、須恵器鉢(18)、青磁碗(19)、緑釉陶器皿(20)、灰釉陶器椀(21)、土師器皿(22)、須恵器甕(23)土師器羽釜(24・25)、弥生土器(26)などがある。形態的な特徴がとらえやすく、帰属時期の指標にしやすい遺物を中心にみると、黒色土器椀は9世紀中ごろから10世紀のものが含まれるとみられる。16は9世紀末葉から10世紀前半、17は10世紀末葉から11世紀初頭、20・21は10世紀代のものと考えられる。19・20は口縁部が残存しているのみなので、形態的特徴を把握することはできないが、平安時代のものととらえられる。20は濃緑色と、透明度の高い淡緑色の釉がまだら模様で施されているようにみえるが、残存部が限られていることもあり、意図的なものかどうかは不明である。21は灰白色の素地に、若干黄緑色がかった透明度の高い釉が薄く塗布されている。17は全体に煤が付着しており、若干黒色化している。これらも平安時代の所産である。一方、18は14世紀後葉、22は12~13世紀、24・25は13~14世紀と考えられる。

このように第2-2層出土遺物は、古代のものが多いが、中世の遺物も含まれることから、少なくとも14世紀までの間に形成されたと考えられる。なお他の遺物より古い時期に帰属する26は、下層に含まれていたものが混入したと考えられる。

以上のことから、第1面の検出遺構は10世紀から11世紀の時期に形成され、機能した可能性が高い。さらに、この遺構面を覆う第2-2層出土遺物の中に14世紀後葉の遺物が含まれることから、その時期までこのあたりが居住域に含まれていた可能性がある。

その他の遺物はおおむね第3層の出土遺物だが、図10~15にはそれに加えて土層観察用断面の除去中に出土した遺物や、攪乱土壌から出土した遺物も若干含めている。ただ、土層との帰属関係が明確ではない遺物に関しては、保存状態が良好で時期判断の参考になるものや、他とは異なる特性を帯びた遺物に限って図示した。第3層出土遺物の特徴としては様々な時期のものが含まれ、その種類も多岐にわたることがあげられる。その中には、旧河道がそれ以前の遺跡を浸食した際、流路内に転入したものも多く含まれると考えられることから、間接的にはあるが、川北遺跡や周辺の集落の様子をうかがう手がかりになると考える。また第3層堆積の契機となった、河道の形成と変遷をうかがう手がかりともなると考える。主に第3層から出土した遺物のうち、図10には中世から古代にかけての土器、図11には古代から古墳時代にかけての土師器、図12には古代の須恵器、図13には古代から古墳時代の須恵器と古代から中世に含まれるとみられる瓦・木製品・土製品、図14には古墳時代以前の土器・土製品、図15には打製石器をまとめた。

図10-30・図11-72・図12-99・図14-177は、第2面で検出した足跡の埋土から出土したものである。足跡の埋土は第3層と近似しており、足跡のくぼみに旧河道を流れる水が運んだ土砂が落ち込んで埋積したものととらえられる。つまり足跡の埋土から出土した遺物は、流水によって運ばれた土砂である第3層の形成当初に混入していたものと考えられる。それらの遺物のうち最も古いのは177で、弥生時代中期後葉から後期に属すると考えられる。一方、最も新しい時期のものはA類の黒色土器椀(30)である。30は細片のため、全体の器形をとらえることができないものの、器壁が薄く、



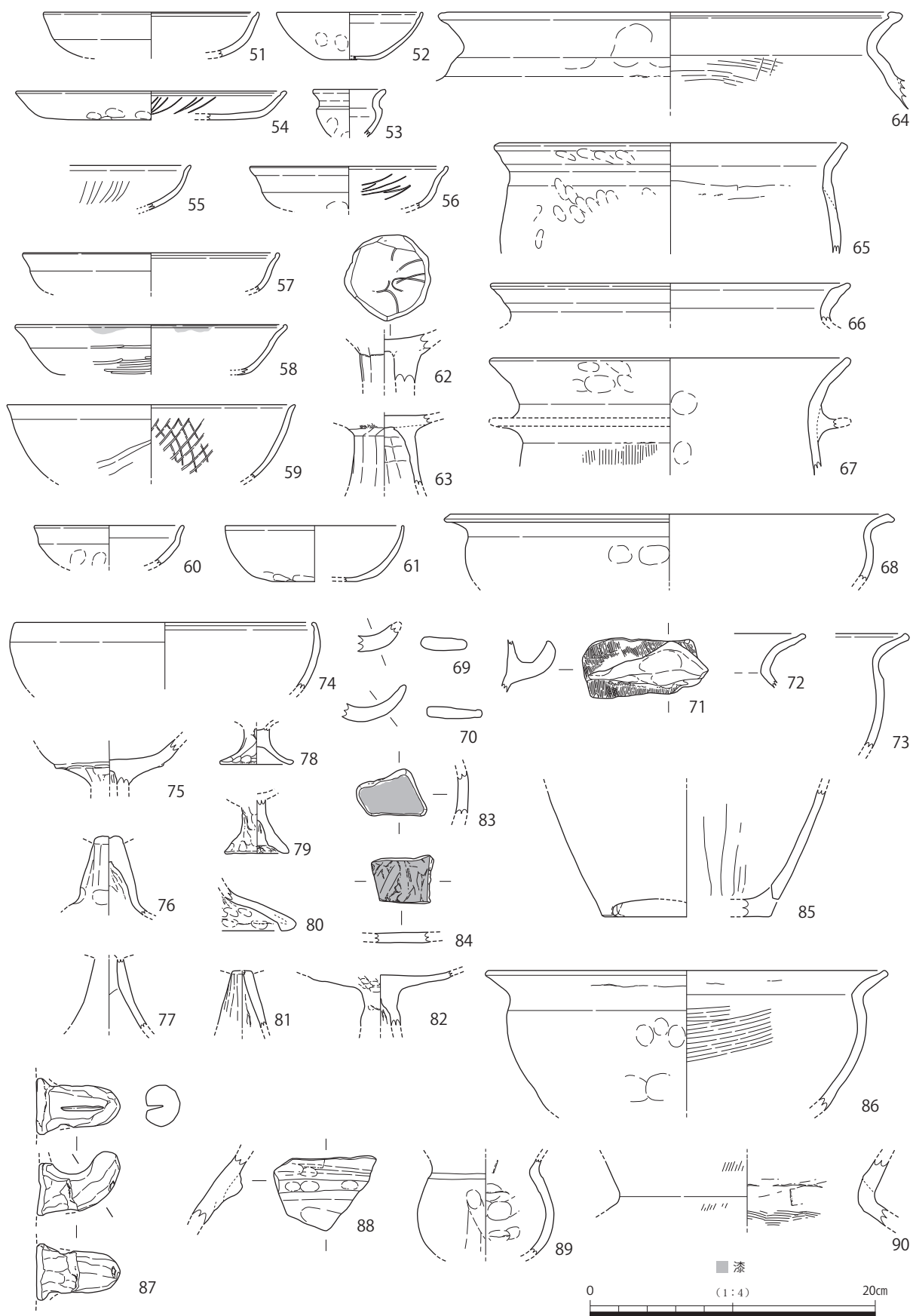


图 11 16-1 第3层出土土器(1)

口縁端部内面に凹線をめぐらせ、外面にも丁寧にヘラミガキを施すなど、B類の黒色土器と類似する点が多いことから、11世紀前半ごろの時期と考える。それ以外の遺物はおおむね9世紀に含まれる。第3層は複数の旧河道の埋土によって形成されているので、必ずしも最も新しい遺物の時期を挙げて、最も古い河道の成立時期とすることはできない。第1面検出の遺構が10世紀代と考えられることから、その基盤層をなす流路の形成時期はさらにそれをさかのぼることとなる。第2面検出の足跡埋土に含まれていた遺物の出土状況からみて、最初の河道の形成時期は10世紀を下限とし、それをさかのぼる可能性があることを指摘したい。

図10-36～41は第3層出土遺物のうち、最も新しい時期に属するとみられる遺物である。36～40は13～14世紀に含まれる土師器羽釜で、41の土師器皿はそれよりもさらに時期が下るかもしれない。これらの遺物は第1面および第2-2層を切り込んで流れた河道の堆積層に含まれていたと考えられる。第2-2出土遺物と、これらの遺物の時期から、第1面を切り込んで流れた旧河道の形成時期は14世紀を上限とすることができる。

図10-27・44～46・48は土師器皿である。46は口縁端部を若干「て」字状に丸く収め、やや古相を呈するが、おおむね12世紀代のものではないかと考える。46を除くと、いずれの土師器皿も外面には底部のみ、もしくは底部から体部にかけてユビオサエの痕跡が明瞭に残される。図10-42・47～50は土師器碗で、47の他はおおむね10世紀に属するのではないかと考える。

図10-28・29は瓦器碗である。29は攪乱土壌からの出土遺物だが、今回の調査で出土した瓦器碗の中では最も残存状態が良かったため図示した。全体的にみて瓦器碗の出土量がきわめて少なかったことに加えて細片が多く、図化できたのはこの2点である。28は器壁が薄く、口縁部内面に凹線が1条めぐらされている。磨滅のため調整は不明瞭だが内外面ともにヘラミガキが施される。29は内外面ともにヘラミガキが施され、見込には格子状の暗文を有する。これらの特徴から11世紀後葉から12世紀に含まれると考える。

口縁部が残る黒色土器碗のうち、口縁部内面に明瞭に1条の凹線をめぐらせるのは図10-30・31である。図10-32は口縁端部に、凹線とまではいかないものの、ヘラ状の工具で上方から線を入れようとしたかのような段を有する。図10-33はA類だが、外面にも上半部まで炭素の吸着範囲が及んでいる。図10-34は全体に磨滅しており、調整は不明である。図10-35は内面に細かいヘラミガキを密に施し、外面はユビオサエ後ナデで仕上げ、接合痕が残存する。これらの黒色土器はおおむね10世紀に含まれるとみられるが、35はそれより若干時期がさかのぼるのではないかと考える。

図11-51・55～58は土師器杯、図11-54は土師器皿、図11-52・59～61は土師器碗、図11-74は土師器鉢である。51は内外面とも若干煤けて黒色化している。52も外面が若干煤けており、内面は二次的な被熱によりやや赤色化しているようにみえる。いずれも器壁が磨滅しており、調整は不明瞭である。51・54は口縁部内面に浅い凹線を1条めぐらせる。51・52・54は8世紀末葉から9世紀初頭、もしくは9世紀に含まれると考える。

56～58は口縁部を丸く肥厚させて若干内側に屈曲させているのに対し、55は口縁端部を外反させて収めている。58は口縁端部に部分的に煤が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。これらはいずれも8世紀に属すると考える。

59は内面に格子状の暗文を入れ、外面はケズリ後ナデで仕上げる。59・60はともに口縁部を軽く外反させるが、61は口縁端部を僅かに肥厚させて丸くおさめる。いずれも体部が丸みを帯びており、

7世紀の所産ではないかと考える。74は土師器の鉢だが、丸みを帯びた立ち上がりと、口縁端部の形状が61に類似している。ただこちらの方は口縁端部が丸く肥厚してみえるように、口縁端部に近い内面に強いヨコナデを施して浅くくぼませており、新相を帯びると考える。外面は全体にやや煤けており、若干黒色化する。

図11-62・63は高杯の脚部である。いずれも外面を縦方向のケズリで面取りしており、62には杯部の見込みに付されていた暗文が僅かに残存する。いずれも8世紀の所産である。

図11-64～73、85～87は甕・羽釜・甑などからなる土師器の煮沸具である。64は9世紀後半から10世紀前半に属するとみられる。66～73は8～9世紀に含まれると考える。85～87は5～7世紀に属する時期のものと考えられる。

図11-75～82は土師器高杯である。いずれも細片で全体の形状がわかるものはないが、75・76・78～80は脚部にユビオサエが顕著に残り、脚柱部に面取りを思わせる縦方向のナデの痕跡が認められ、7世紀の所産であろう。一方、77・81はユビオサエを残さず丁寧に仕上げられている。また82は脚部と杯の接合部分を若干絞るような特徴的な形態をしており、前述の高杯よりも古相を帯びると考える。

図11-83・84は土師器の細片だが、内面を漆の被膜が覆う。ちなみに84は攪乱土壌から出土したものである。もとの器形はわからないが、漆が均一な厚さで付着しており、84は漆をへら状の工具で塗りつけた際に生じたわずかな凹凸が認められた。今回の調査では漆を貯蔵するのに使用したとみられる須恵器壺(図12-124)も出土している。

図11-88は朝顔形埴輪の破片、図11-89は土師器壺、図11-90は土師器甕である。89と90はいずれも内面に粘土の接合痕が部分的に残る。これらは古墳時代中期に属するのではないかと考える。

今回の調査で出土した須恵器のうち、全体の形状がとらえられるものは少なかったが、大半は飛鳥時代から平安時代前葉のもので、古墳時代のもものが若干含まれている状況がうかがえた。図12-91は須恵器杯で、9世紀の所産である。図12-92～101は須恵器の底部で、杯や壺などが含まれると考えられる。それらはおおむね9世紀に含まれるとみられるが、95は残存部位が限られているため断定はできない。図12-102は壺の口縁部から頸部で、9世紀とみられる。図12-103・104は須恵器壺の底部だが、墨が残存していた。103は底部内面にほぼ全体にわたって塗膜状に墨が残存していたことから、墨をためておくために使用したとみられる。一方、104は底部外面に墨が薄く付着していた。こちらは壺が破損した後、硯として転用したとみられる。おそらく高台の部分を上にして安定的に置くよう、体部を意図的に打ち欠いたと考えられる。墨が付着した遺物は他にも4点出土している。

図12-117は須恵器杯の底部で、見込みに墨がシミ状に3箇所残存していた。内面の器壁は磨滅して滑らかになっていることから、硯として用いられたと考えられる。図12-127は須恵器杯蓋で、カエリの部分に帯状に墨が付着していた。このことから内面を上に向けて、転用硯として使用したと考えられる。図12-125は須恵器壺の下半部で、底部外面の高台に囲まれた部分に墨が明瞭に付着していた。これも上下をひっくり返して底部外面を硯として使用できるよう、体部を意図的に打ち欠いたと考えられる。図12-128は須恵器の破片で、内面に墨がシミ状に付着していた。外面は平行タタキの後ナデが施されたとみられ、内面には同心円状の当て具痕が残る。転用硯として使用されたとは考えにくく、墨の貯蔵容器だった可能性が考えられるが、断定はできない。103・104は9世紀、117は

8世紀後葉から9世紀、125は8世紀の所産と考える。

図12-105～107、119～121、126は須恵器の壺・甕の口縁部である。105・106は形態的特徴が類似するが、105の口縁端部の成形の仕方の方が、106より簡略化している印象を受ける。107と120は体部外面にタタキを施し、内面に当て具痕が残るが、107の方は外面のタタキの後、軽くナデを施している。119も体部にタタキが施されているとみられるが、残存部位が限られているため詳

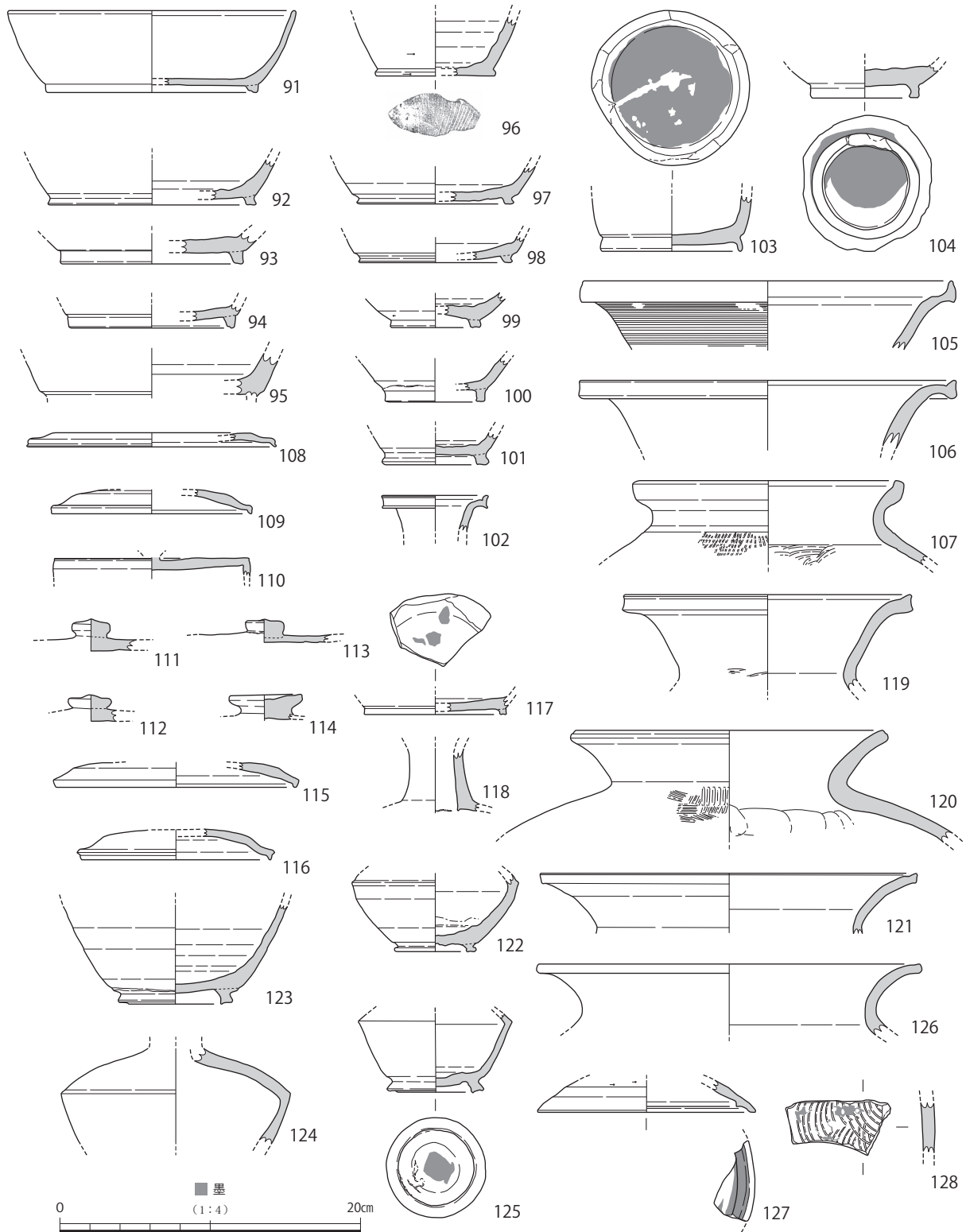


図12 16-1 第3層等出土土器(2)

細はわからない。

図 12 - 108 ~ 116 は須恵器蓋である。108 ~ 110 に比べて、115・116の方が口縁端部の面取りが丁寧に行われており、頂部から口縁部にかけての屈曲がしっかりしており、古相を帯びると考える。図 12 - 111 ~ 114 に関しては時期を絞ることはできないが、それ以外のものは 8 ~ 9 世紀に含まれると考える。

図 12 - 118、122 ~ 124 は須恵器壺である。122 は 124・125 と同種の壺だが、124・125 の体部屈曲部より上半が直線的に頸部にむかってすぼまるのに対し、122 はやや丸みを帯びるとみられる。123 は端部の成形を丁寧に施した、やや外方に広がるしっかりした高台が付されているが、底部との接合部分には接合痕が明瞭に残る。124 は内面に漆が付着している。漆の被膜はシミ状に付着しており、範囲は屈曲部の上まで至る。頸部が細く内部が乾燥しにくい形状の壺を用いた、漆の貯蔵容器とみられる。体部外面には屈曲部より上の部分において、全面的に自然釉が付着する。同器種の漆貯蔵容器は、川北遺跡 13 - 1 の調査でも 2 点出土している。図 11 - 83・84 とあわせて考えると、川北遺跡に展開していた集落やその近辺に漆を用いた工房が存在していたことが推測できる。

図 13 - 129 ~ 132 は須恵器杯である。129 は底部外面に、回転ヘラ切り後にナデを施している。130 ~ 132 は底部外面に回転ヘラケズリ後ナデを施しているとみられる。130 ~ 132 は 7 世紀の所産とみられるが、129 はそれらよりやや作りが粗雑で、時期の下る可能性がある。

図 13 - 133 は、内面上部が湾曲しながらすぼまっていることから、高杯の脚部と考えた。残存部をみる限り、透かし孔や穿孔は認められない。図 13 - 134 は須恵器壺で、体部外面に平行タタキが認められる。焼成温度が低かったとみられ、全体に軟質で特に外面の磨滅が著しい。内面にはユビオサエと粘土の接合痕が明瞭に残る。図 13 - 135 は須恵器台付椀で、脚部におそらく 3 箇所穿孔が施されている。図 13 - 136 は須恵器壺で、口縁端部は凹面を作り出す。粘土の接合痕がところどころに残り、仕上げがやや雑な印象をうける。これらはおそらく 7 世紀の所産ではないかと考える。

図 13 - 137 は高杯の杯部ではないかと考える。底部から体部にかけてのわずかな屈曲は、無蓋高杯の形態的特徴の名残をとどめたものではないかと考える。6 世紀の所産だろうか。図 13 - 138 は須恵器高杯の脚部とみられる。杯部との接合箇所近くにカキメが施される。透かし孔や穿孔はなく、浅い凹線が 2 条ずつ 2 箇所に入れられている。ハケではなく、板状の工具で入れられたとみられる波状文で加飾されている。6 世紀末葉から 7 世紀の所産だろうか。図 13 - 139 は須恵器壺で、体部外面に平行タタキを施す。内面には若干粘土の接合痕が残る。5 世紀末葉から 6 世紀初頭の所産とみられる。

図 13 - 140 ~ 144 は須恵器杯身と杯蓋である。140 ~ 142 は 6 世紀、143・144 は 5 世紀の所産とみられる。図 13 - 145 は湾曲する体部外面に 2 条の凹線を入れ、その間に刺突文を施しているのがみて取れる。残存部分がきわめて限られるが、文様構成などから臆の体部ではないかと考える。

図 13 - 148 ~ 151 は外面に波状文を施す須恵器片である。図 13 - 146 は外面と内面に自然釉が付着している。外面はほぼ全面にわたって付着するのに対し、内面の釉は狭まっている方から広がっていく方に釉が垂れている。波状文の傾きも含めて勘案すると、上方と下方に向かって広がる円筒形の器形であると考えられる。内面に釉がかかっていることを考えると、焼成時に上方は開口していたと考えられる。器台の可能性が考えられる。図 13 - 147 は器台の脚部とみられ、三角形の透かし孔が 2 箇所確認できる。凹線を挟んで下の段にも透かし孔が入れられていた。細片だが精緻に仕上げられている。

148 の器形は不明だが、上部が薄く華奢なので、口縁端部に近い部分ではないかと考える。149 は

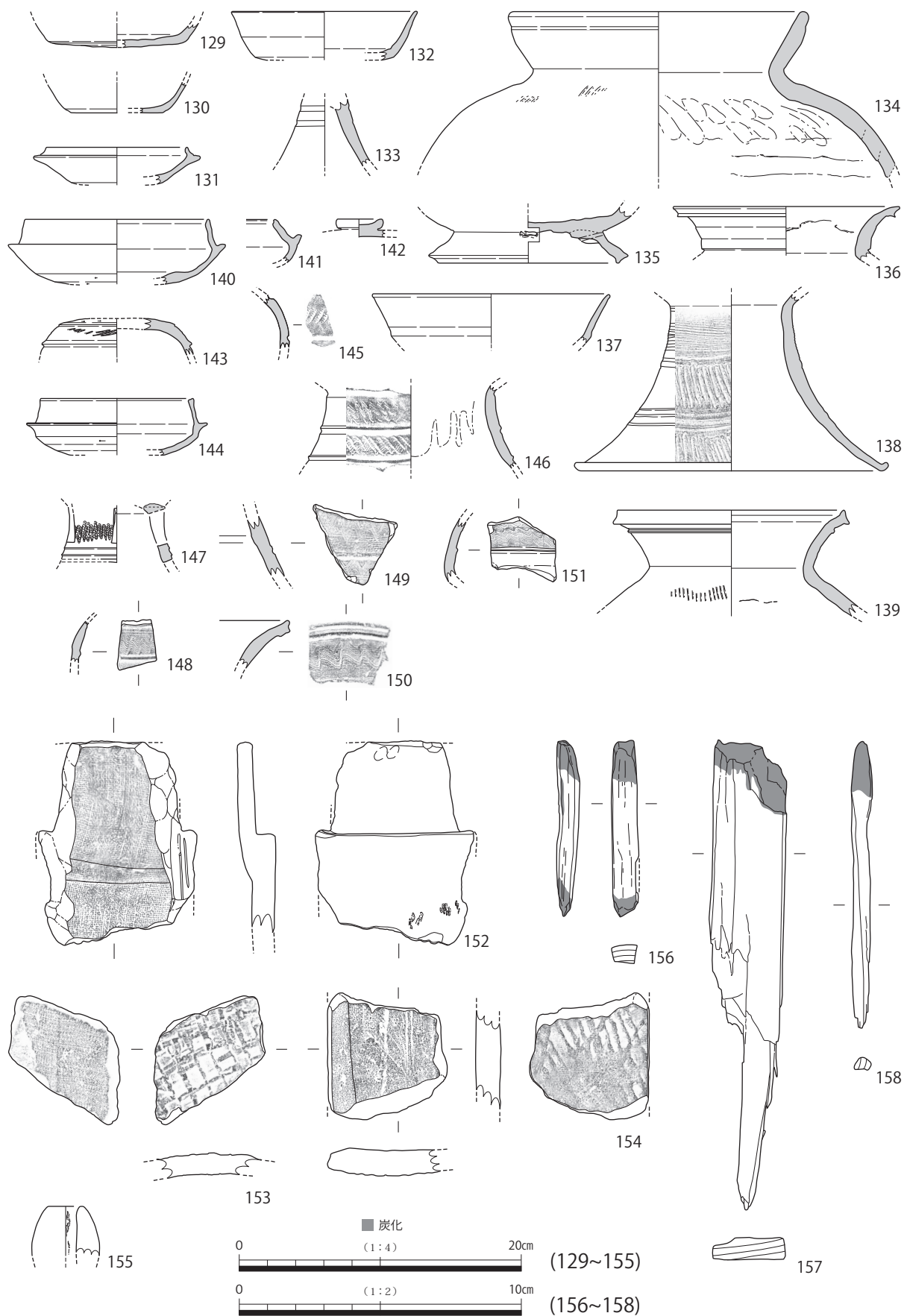


图 13 16-1 第3層等出土土器〔瓦・木製品・土製品含む〕(3)

高杯の脚部、150は壺の口縁部、151は甕の頸部ではないかと考える。

図13-152~154は瓦の破片である。152は丸瓦の破片で、上面の磨滅が著しく、調整は不明確だが、僅かに縄目タタキの痕跡が認められる。下面には布目圧痕が残る。側面が若干残存しており、ケズリの痕跡が認められる。153は平瓦の破片で、二次的に被熱したためか全体に赤変している。上面に斜格子目タタキ、下面に布目圧痕が認められる。残存部位が限られているため、斜格子目の全体的な特徴を把握することはできないが、船橋廃寺出土の瓦の中にも斜格子目タタキを有するものが認められる。154は平瓦の破片で、焼成温度が低かったためか、やや軟質で土師器のような色合いを呈する。上面に格子目タタキ、下面に布目圧痕が認められる。図13-155は漁網の重りに用いられた土錘である。図13-156~158は棒状の木片の端部が焼けて炭化していることから、火付け木と考えられる。瓦はおそらく古代のものと考えられる。155~158の帰属時期は不明である。

図14-159~162は土師器竈かもしくはその可能性がある破片である。159は端部にケズリを施したのちナデで仕上げられており、口縁端部外面に煤が付着していた。口縁端部を煮沸具の掛口ととらえると、竈の可能性があると考えた。ただ全体に小さいことから、竈であったとしてもミニチュアと考えられる。160は生駒西麓産胎土で、凸面を呈する面は二次的な被熱のため若干赤変している。一方、反対側の面は煤けて若干黒色化する。これらのことから、竈の脚部の破片ではないかと考える。161は突帯を有することから円筒埴輪の可能性も否定できないが、突帯の断面形状が上下方向で対称にならない

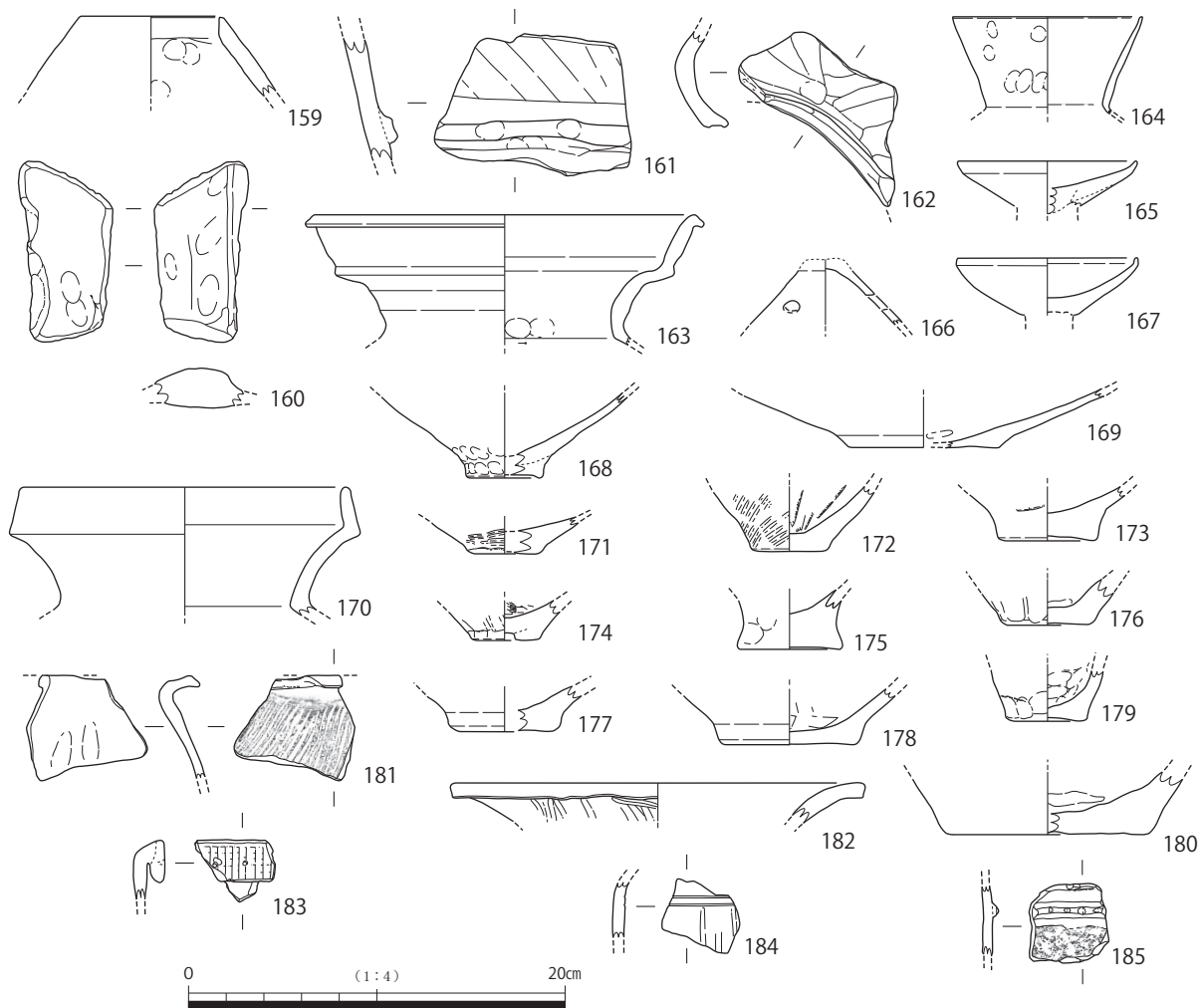


図14 16-1 第3層等出土土器(4)

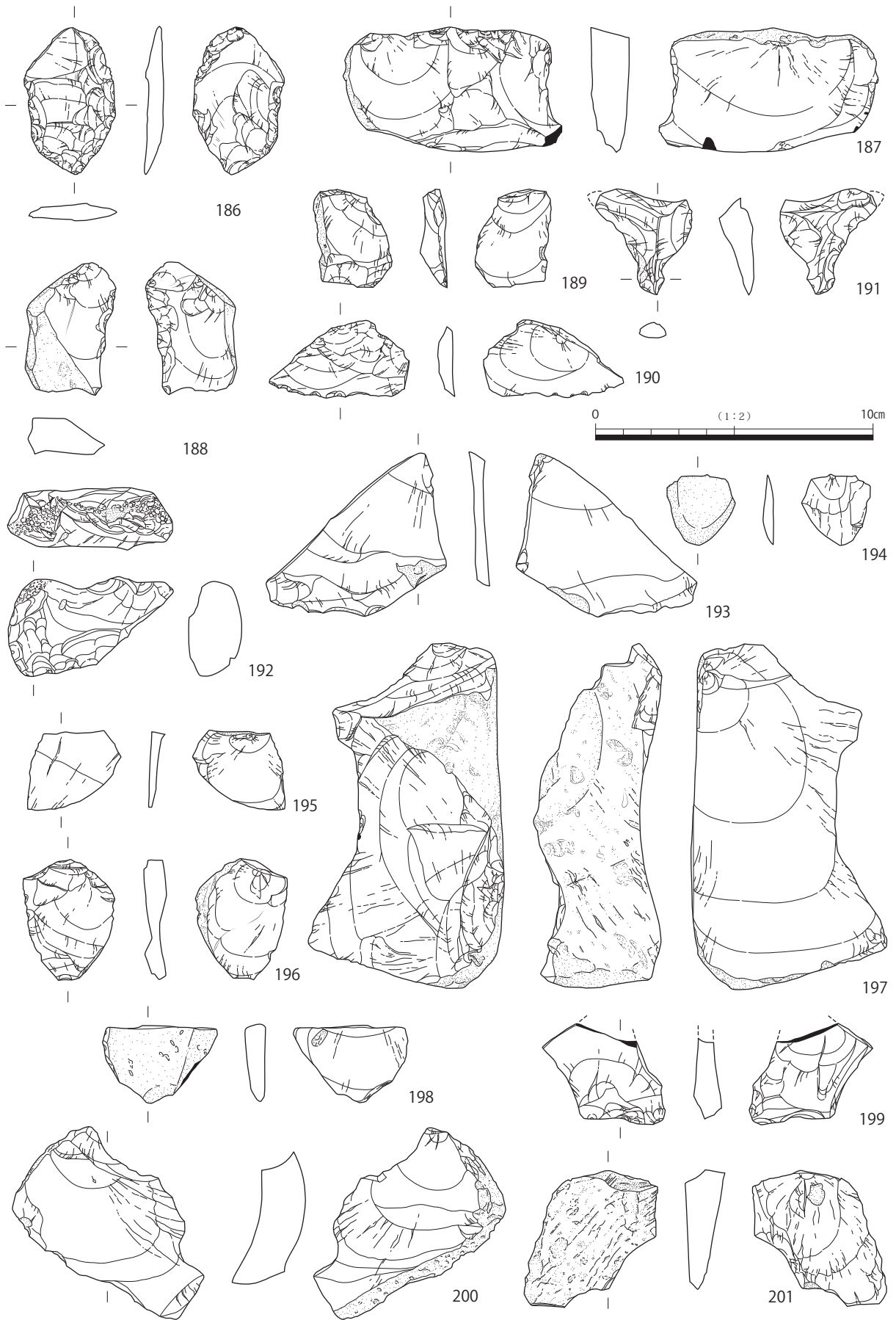


図 15 16-1 サヌカイト製石器



い点、円筒埴輪の調整に多用されるハケメがみられず、外面にナデと部分的にケズリが施されていることから、伏尾遺跡出土の突帯を有する土師器竈と似た形態のものの可能性を考えた。ちなみに内面はユビオサエを伴う強いナデで仕上げられている。ただ、本品に強く熱を受けたような痕跡は認められず、断定はできない。162は竈の焚口に作り出された庇状の張り出しを含む破片である。外面はユビオサエを伴う強いナデ、内面はケズリ後ナデで仕上げている。

図14-163は土師器二重口縁壺である。口縁端部は強いヨコナデを施して外反させている。体部内面はケズリの後、ナデを施したとみられる。図14-164は土師器壺で、粘土のきめが細かく、ミガキの痕跡は認められないものの、表面は若干光沢を帯びている。外面はユビオサエの後ナデ、内面はナデで仕上げる。図14-165～167は土師器小型器台である。いずれも杯部と脚部の接合部分で剥離しており、166の頂部には板状の工具でつけた刻目が残存する。167は口縁部に一部、黒斑がある。いずれも磨滅しており調整は不明である。これらの土器は4世紀に含まれると考える。

図14-170は攪乱土壌から採取した生駒西麓産胎土の壺である。内面は全体に煤けて黒色化しており、外面も口縁部が若干黒色化する。内外面とも磨滅しており、調整は不明である。弥生時代後期から庄内式にかけての広口壺かと考える。

図14-168・169は古墳時代前期の壺底部と考えるが、169はそれよりも時期がさかのぼる可能性がある。168は内面全体に薄く煤が付着し、黒色化する。169は生駒西麓産胎土である。

図14-171～184は弥生時代に含まれるとみられる。今回の調査で出土した当該期の土器は少量で細片が多いが、その中でも中期後葉から後期のものが大半を占める。171・172は外面にタタキを施す。内面の調整は171が磨滅により不明だが、172はハケ調整後ナデで仕上げたとみられる。173は生駒西麓産胎土で、外面に僅かにケズリの痕跡が認められる。内面はナデで仕上げられており、全体に煤が付着して黒色化している。174も内面が若干煤けて黒色化している。175は全体に磨滅するが、外面に若干ユビオサエの痕跡が残る。171～175は、中期後葉までさかのぼる可能性のあるものも含むが、おおむね弥生時代後期の所産ととらえられる。一方、176～180には一部後期初頭に下る可能性があるものの、おおむね弥生時代中期の所産とみられる。181は甕の口縁部で、口縁部の形状や外面の粗いハケが他の弥生土器とは異なっており、他地域から運ばれたものと考えられる。弥生時代後期に含まれるものか。182は壺の口縁部で、内面は磨滅により調整が不明だが、外面はヘラミガキされている。中期前葉の所産か。183と184はいずれも生駒西麓産胎土で183は中期、184は前期のものともみられる。

図14-185は胎土に石英・長石を多く含むこと、隆帯の下部に縄文の可能性のある点状のくぼみの列がみられることから、縄文時代中期の土器の可能性もある。もしそうであれば、RLの縄文を付した船元式土器の可能性もある。表面の磨滅が著しく、調整は不明である。

図15-186～192は機能部が作り出されていたり、使用に伴う微細剥離がみられるもの、図14-193～201は剥片である。いずれも素材はサヌカイトである。186～190は、おそらく打面調整の際に生じた剥片を用いた刃器もしくは削器とみられ、186・188には両面から調整剥離を施して刃部を作り出している。187・189・190は縁辺の鋭い割れ口を利用したとみられ、その部分に使用に伴う微細剥離が認められる。191は石錐で、錐部が2箇所作り出されているが、うち1箇所は使用に伴い欠損したとみられる。192は素材剥片を取りきった石核を、敲石に転用したもので、側面は敲打痕に覆われて白色化する。これら石器・剥片のうち、196・200は極めて磨滅が著しいことから、流路に転入してから流れに運ばれてくるうちに磨滅した可能性が考えられる。ただそれら以外は目立った風化・

磨滅がみられないこと、第3層に堆積している砂層よりも明らかに比重が大きいものが含まれていることから、旧河道の陥入に伴って、近辺の遺物包含層に含まれていたものが流水で削平され、埋土に混入したものと考えられる。つまりごく近辺に埋まっていたものと考えられる。石核が含まれていたことから、近辺で石器生産が行われていたことがうかがえる。

表1 16-1 遺物観察表 1

掲載番号	調査区	層位・遺構	器種	時期		備考
1	Ⅱ	6溝	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	
2	Ⅱ	6溝	黒色土器B類 椀	11世紀	平安時代	
3	Ⅱ	6溝	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	
4	Ⅱ	6溝	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	
5	Ⅱ	6溝	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	墨書あり
6	Ⅱ	6溝	土師器 椀	10世紀	平安時代	
7	Ⅱ	6溝	土師器 椀	10世紀	平安時代	
8	Ⅱ	6溝	土師器 椀	10世紀か	平安時代	
9	Ⅱ	6溝	土師器 椀	10世紀か	平安時代	
10	Ⅱ	7土坑	土師器 椀	11世紀	平安時代	灯明皿
11	Ⅱ	1ピット	土師器 皿			
12	Ⅱ	第2-2層	黒色土器A類 椀	9世紀	平安時代	⑳・㉓層出土
13	Ⅱ	第2-2層	黒色土器A類 椀	9世紀中頃	平安時代	⑳・㉓層出土
14	Ⅱ	第2-2層	黒色土器A類 椀	10世紀後半	平安時代	
15	Ⅱ	第2-2層	黒色土器A類 椀	9世紀	平安時代	
16	Ⅱ	第2-2層	土師器 椀	9世紀末～10世紀前葉	平安時代	
17	Ⅱ	第2-2層	土師器 甕	10世紀末～ 11世紀初頭	平安時代	⑳・㉓層出土
18	Ⅱ	第2-2層	須恵器 鉢	14世紀後葉	室町時代	
19	Ⅱ	第2-2層	青磁 碗		平安時代	
20	Ⅱ	第2-2層	緑釉陶器 皿		平安時代	
21	Ⅱ	第2-2層	灰釉陶器 椀	10世紀	平安時代	⑳・㉓層出土
22	Ⅱ	第2-2層	土師器 皿	12世紀か	平安時代	
23	Ⅱ	第2-2層	須恵器 甕			
24	Ⅱ	第2-2層	土師器 羽釜	13世紀～14世紀	鎌倉～室町時代	⑳・㉓層出土
25	Ⅱ	第2-2層	土師器 羽釜	13世紀～14世紀	鎌倉～室町時代	
26	Ⅱ	第2-2層	弥生土器 底部		弥生時代中期	
27	I	第3層	土師器 皿	12世紀	平安時代	
28	I	第3層	瓦器 椀	12世紀後葉	平安～鎌倉時代	
29	Ⅱ	攪乱	瓦器 椀	11世紀後葉～ 12世紀前葉	平安時代	
30	I	第3層 (第2面足跡埋土)	黒色土器 椀	11世紀前半	平安時代	
31	Ⅱ	第3層	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	
32	Ⅱ	第3層	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	
33	Ⅱ	第3層	黒色土器A類 椀	10世紀	平安時代	
34	Ⅱ	第3層	黒色土器 底部	10世紀中頃か	平安時代	
35	Ⅱ	第3層	黒色土器A類 椀	9世紀中頃	平安時代	
36	Ⅱ	第3層	土師器 羽釜	13世紀～14世紀	鎌倉～室町時代	
37	I	第3層	土師器 羽釜	14世紀	鎌倉～室町時代	
38	I	土層観察用断面	土師器 羽釜	14世紀前葉	鎌倉～室町時代	
39	I	第3層	土師器 羽釜	13世紀～14世紀	鎌倉～室町時代	
40	I	第3層	土師器 羽釜	14世紀	鎌倉～室町時代	
41	I	第3層	土師器 皿	14世紀～15世紀	鎌倉～室町時代	
42	Ⅱ	第3層	土師器 椀	10世紀	平安時代	

表2 16-1 遺物観察表 2

掲載番号	調査区	層位・遺構	器種	時期		備考
43	I	第3層	土師器 杯	10世紀後半	平安時代	
44	II	第3層	土師器 皿	12世紀	平安～鎌倉時代	
45	I	第3層	土師器 皿	12世紀	平安時代	
46	I	第3層	土師器 皿	12世紀	平安時代	
47	I	第3層	土師器 椀	11世紀か	平安時代	
48	II	第3層	土師器 皿	10世紀前葉	平安時代	
49	II	第3層	土師器 椀	9世紀末～10世紀前葉	平安時代	
50	I	第3層	土師器 椀	10世紀	平安時代	
51	II	第3層	土師器 杯	9世紀	平安時代	
52	I	第3層 (第2面足跡埋土)	土師器 椀	8世紀末～9世紀初頭	奈良～平安時代	第4層直上
53	I	第3層	土師器 甕	8世紀～9世紀	奈良～平安時代	ミニチュア
54	I	第3層	土師器 皿	8世紀末～9世紀初頭	奈良～ 平安時代初頭	
55	I	第3層	土師器 杯	8世紀	奈良時代	灯明皿
56	I	土層観察用断面	土師器 杯	8世紀	奈良時代	
57	II	第3層	土師器 杯	8世紀	奈良時代	
58	I	第3層	土師器 杯	8世紀	奈良時代	灯明皿か
59	I	第3層	土師器 椀	7世紀	飛鳥時代	格子暗文
60	I	第3層	土師器 椀	7世紀	飛鳥時代	
61	II	第3層	土師器 椀	7世紀	飛鳥時代	
62	I	第1層～第3層	土師器 高杯	8世紀	奈良時代	
63	II	第3層	土師器 高杯	8世紀	奈良時代	
64	I	第3層	土師器 羽釜	9世紀後半～10世紀前半	平安時代	
65	I	第3層	土師器 甕	9世紀	平安時代	
66	I	第3層	土師器 甕	8世紀～9世紀	奈良～平安時代	
67	II	第3層	土師器 羽釜	8世紀～9世紀前葉	奈良～平安時代	
68	I	第3層	土師器 甕	8世紀	奈良時代	
69	I	第3層	土師器 煮沸具	8世紀	奈良時代	把手のみ
70	I	第3層	土師器 煮沸具	8世紀	奈良時代	把手のみ
71	I	第3層 (第2面足跡埋土)	土師器 煮沸具	8世紀	奈良時代	第4層直上
72	I	第3層	土師器 甕	8世紀	奈良時代	
73	I	第3層	土師器 甕	8世紀～9世紀	奈良～ 平安時代前葉	
74	I	第3層 (第2面足跡埋土)	土師器 鉢	7世紀末～8世紀前葉	飛鳥～奈良時代	第4層直上
75	I	第3層	土師器 高杯	7世紀	飛鳥時代	
76	I	第3層	土師器 高杯	7世紀	飛鳥時代	
77	I	第3層	土師器 高杯	5世紀～7世紀	古墳～飛鳥時代	
78	I	第3層	土師器 高杯	7世紀	飛鳥時代	ミニチュア
79	I	第3層	土師器 高杯	7世紀	飛鳥時代	
80	II	第3層	土師器 高杯	7世紀	飛鳥時代	
81	I	第3層	土師器 高杯	5世紀後半か	古墳時代	
82	I	第3層	土師器 高杯	5世紀か	古墳時代	
83	II	第3層	土師器			漆膜付着

表3 16-1 遺物観察表 3

掲載番号	調査区	層位・遺構	器種	時期		備考
84	Ⅱ	攪乱	土師器		古代	漆膜付着
85	Ⅰ	土層観察用断面	土師器 甌	7世紀	飛鳥時代	
86	Ⅱ	第3層	土師器 鍋	5世紀後葉	古墳時代	
87	Ⅰ	第3層	土師器 煮沸具		古墳時代	把手のみ
88	Ⅱ	第3層	朝顔形 埴輪	5世紀	古墳時代	
89	Ⅰ	第2層～第3層	土師器 壺	5世紀	古墳時代	
90	Ⅰ	第3層	土師器 甕	5世紀前半	古墳時代	
91	Ⅰ	第3層	須恵器 杯	9世紀	平安時代	
92	Ⅰ	第3層	須恵器 壺か	9世紀	平安時代	
93	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
94	Ⅱ	第3層	須恵器	9世紀	平安時代	
95	Ⅰ	土層観察用断面	須恵器	8世紀	奈良時代	
96	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	9世紀後半～10世紀	平安時代	
97	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
98	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
99	Ⅰ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
100	Ⅰ	第3層 (第2面足跡埋土)	須恵器 壺	9世紀	平安時代	第4層直上
101	Ⅰ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
102	Ⅰ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
103	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	底部内面に墨付着
104	Ⅱ	第3層	須恵器 転用硯	9世紀	平安時代	底部外面に墨付着
105	Ⅱ	第3層	須恵器 甕		古代以降	
106	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	9世紀	平安時代	
107	Ⅱ	第3層	須恵器 甕			
108	Ⅱ	第3層	須恵器 蓋		平安時代	
109	Ⅱ	第3層	須恵器 杯蓋	9世紀	平安時代	
110	Ⅰ	第3層	須恵器 壺蓋	8世紀～9世紀	平安時代	
111	Ⅰ	第3層	須恵器 蓋	7世紀～9世紀	飛鳥～ 平安時代前葉	
112	Ⅰ	第3層	須恵器 蓋	7世紀～9世紀	飛鳥～ 平安時代前葉	
113	Ⅱ	第3層	須恵器 蓋	7世紀～9世紀中頃	飛鳥～平安時代	
114	Ⅰ	第3層	須恵器 蓋	8世紀か	奈良時代か	
115	Ⅱ	第3層	須恵器 蓋	8世紀	奈良時代	
116	Ⅰ	第3層	須恵器 蓋	8世紀	奈良時代	
117	Ⅱ	第3層	須恵器 転用硯	8世紀後葉～9世紀	奈良～平安時代	内面に墨付着
118	Ⅰ	土層観察用断面	須恵器 壺	8世紀～9世紀	奈良～平安時代	
119	Ⅰ	第3層	灰釉陶器 壺か	8世紀後葉～9世紀前葉	奈良～平安時代	
120	Ⅱ	第3層	須恵器 甕	8世紀	奈良時代	
121	Ⅰ	第3層	須恵器 壺	8世紀	奈良時代	
122	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	8世紀中頃	奈良時代	
123	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	8世紀	奈良時代	
124	Ⅰ	第3層	須恵器 壺	8世紀	奈良時代	

表4 16-1 遺物観察表 4

掲載番号	調査区	層位・遺構	器種	時期		備考
125	Ⅱ	第3層	須恵器 転用碗	8世紀前葉	奈良時代	底部外面に墨付着
126	I	第3層	須恵器 壺	7世紀～8世紀	飛鳥～奈良時代	
127	I	第3層	須恵器 転用碗	7世紀後葉～8世紀初頭	飛鳥～奈良時代	内面に墨付着
128	Ⅱ	第3層	須恵器			内面に墨付着
129	Ⅱ	第3層	須恵器 杯	8世紀	奈良時代	
130	I	第3層	須恵器 杯	7世紀	飛鳥時代	
131	Ⅱ	第3層	須恵器 杯身	7世紀	飛鳥時代	第3層最下部
132	Ⅱ	第3層	須恵器 杯身	7世紀	飛鳥時代	
133	I	第3層	須恵器 高杯	7世紀	飛鳥時代	
134	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	7世紀	飛鳥時代	
135	I	第2層～第3層	須恵器 台付椀	7世紀	飛鳥時代	
136	I	第3層	須恵器 壺	7世紀	飛鳥時代	
137	I	第3層	須恵器 高杯	6世紀	古墳時代	
138	I	第3層	須恵器 高杯	6世紀～7世紀	古墳～飛鳥時代	
139	Ⅱ	第3層	須恵器 壺	5世紀末～6世紀初頭	古墳時代	
140	Ⅱ	第3層	須恵器 杯身	6世紀前葉	古墳時代	
141	I	第3層	須恵器 杯身	6世紀前葉	古墳時代	
142	I	第3層	須恵器 蓋	6世紀	古墳時代	
143	I	第3層	須恵器 蓋	5世紀	古墳時代	
144	Ⅱ	第3層	須恵器 杯身	5世紀後葉	古墳時代	
145	Ⅱ	第3層	須恵器 臚	5世紀	古墳時代	
146	Ⅱ	第3層	須恵器 器台か		古墳時代	
147	Ⅱ	第3層	須恵器 器台		古墳時代	
148	Ⅱ	第3層	須恵器		古墳時代	
149	Ⅱ	第3層	須恵器 高杯		古墳時代	
150	I	第3層	須恵器 壺	6世紀	古墳時代	
151	Ⅱ	第3層	須恵器 甕か		古墳時代	
152	I	第3層	瓦		古代	
153	I	土層観察用断面	瓦		古代	
154	Ⅱ	第3層	瓦		古代	
155	I	土層観察用断面	土師器 土錘			
156	Ⅱ	第3層	火付け木			
157	Ⅱ	第3層	火付け木			
158	Ⅱ	第3層	火付け木			
159	I	第3層	土師器 竈か			ミニチュアか
160	Ⅱ	第3層	土師器 竈			生駒西麓産胎土
161	I	第3層	土師器 竈か		古墳時代	第4層直上
162	Ⅱ	第3層	土師器 竈		古墳時代	
163	I	第3層	土師器 二重口縁壺	4世紀後葉	古墳時代	
164	I	第3層	土師器 壺	4世紀	古墳時代	
165	Ⅱ	第3層	土師器 小型器台	4世紀	古墳時代	
166	Ⅱ	第3層	土師器 小型器台	4世紀	古墳時代	
167	I	第3層	土師器 器台	4世紀	古墳時代	黒斑あり
168	Ⅱ	第3層	土師器 壺		古墳時代前期	

表5 16-1 遺物観察表 5

掲載番号	調査区	層位・遺構	器種	時期	備考
169	Ⅱ	第3層	土師器 壺	古墳時代前期	生駒西麓産胎土
170	Ⅱ	攪乱	弥生土器 壺	弥生～古墳時代	生駒西麓産胎土
171	Ⅱ	第3層	弥生土器 甕	弥生時代後期	
172	Ⅱ	第3層	弥生土器 甕	弥生時代後期	
173	Ⅱ	第3層	弥生土器	弥生時代後期	生駒西麓産胎土
174	Ⅰ	第3層	弥生土器	弥生時代後期	
175	Ⅱ	第3層	弥生土器	弥生時代後期	
176	Ⅰ	第3層	弥生土器 甕	弥生時代中期	第4層直上
177	Ⅰ	第3層 (第2面足跡埋土)	弥生土器 壺	弥生時代後期	
178	Ⅱ	攪乱	弥生土器	弥生時代中期	
179	Ⅱ	第3層	弥生土器	弥生時代後期	
180	Ⅰ	第3層	弥生土器 甕	弥生時代中期	
181	Ⅱ	第3層	弥生土器 甕	弥生時代後期	
182	Ⅱ	第3層	弥生土器	弥生時代中期前葉	
183	Ⅱ	第3層	弥生土器	弥生時代中期	生駒西麓産
184	Ⅰ	第3層	弥生土器 甕	弥生時代前期	生駒西麓産
185	Ⅱ	第3層	縄文土器	縄文時代中期	
186	Ⅱ	第3層	打製石器		サヌカイト
187	Ⅱ	第3層	打製石器		サヌカイト
188	Ⅱ	第3層	打製石器		サヌカイト
189	Ⅱ	第3層	打製石器		サヌカイト
190	Ⅱ	第3層	打製石器		サヌカイト
191	Ⅰ	土層観察用断面	打製石器		サヌカイト 石錘
192	Ⅰ	第3層	敲石		サヌカイト 石核転用
193	Ⅰ	第3層	剥片		サヌカイト
194	Ⅰ	土層観察用断面	剥片		サヌカイト
195	Ⅰ	第3層	剥片		サヌカイト
196	Ⅰ	土層観察用断面	剥片		サヌカイト
197	Ⅱ	第3層	剥片		サヌカイト
198	Ⅰ	第3層	剥片		サヌカイト
199	Ⅱ	第3層	剥片		サヌカイト
200	Ⅱ	第3層	剥片		サヌカイト
201	Ⅱ	第3層	剥片		サヌカイト

## 第5章 18 - 1 の調査成果

### 第1節 基本層序

#### 1区

本調査では、第2層より調査を開始している。旧耕土および第1層は、削平などにより失われていると考えられる。記述において、土壌層や作土層については第○a層、その下位の母材となる自然堆積層を第○b層としている。

なお、1区と2区は直線距離で170m離れており、層序を対比することが困難であったため、1区、2区各々で基本層序を設定した。層名が同じでも同一層準ではないことを断っておく。

**第2層：**中世に考えられる層準で、4層に細分できる。総じて砂質が強く砂っぽい土質である。第2-1a層は、黄褐色シルト混り細砂で中砂から極粗砂粒を多く含む土壌層である。第2-2a層は、灰黄色中砂から細砂でシルトブロックが混じる。土壌化があまり強く進んでいない。第2-3a層は、オリーブ褐色細砂混りシルトで中砂から粗砂粒を含む土壌層である。第2-3b層は、にぶい黄橙色極粗砂から中砂で小礫を含み、ラミナがみられる。氾濫堆積物である。

**第3層：**中世に考えられる層準である。大きく3層に細分できる。第3-1a層は、暗緑灰色細砂混りシルトの土壌層である。第3-2a層は、灰色シルト混り細砂で粗砂から中砂粒を僅かに含む土壌層である。第3-2b層は、灰白から灰色極粗砂からシルトで、ラミナがみられる。氾濫堆積物である。細かくみると細分できる。上から順に、細砂から極細砂で粗砂から極粗砂が断続的にみられる層、小礫混じりの粗砂から極粗砂層、細砂から極細砂層、中砂から極細砂層である。

第3-2b層からは、瓦器片や黒色土器片を含むものの、奈良時代前半の土器がまとまって出土している。

**第4層：**古代から中世に考えられる層準で、2層に細分できる。第4-1a層は、緑灰色細砂でシルトブロックを含む。土壌層である。上面には、第3-2b層が充填された人の足跡がみられる。

第4-2a層は、緑灰色シルト混り細砂の土壌層である。

**第5層：**第5a層は、暗緑灰色シルトの土壌層である。出土遺物は、須恵器の小片1点のみで時期の確定は難しい。

#### 2区

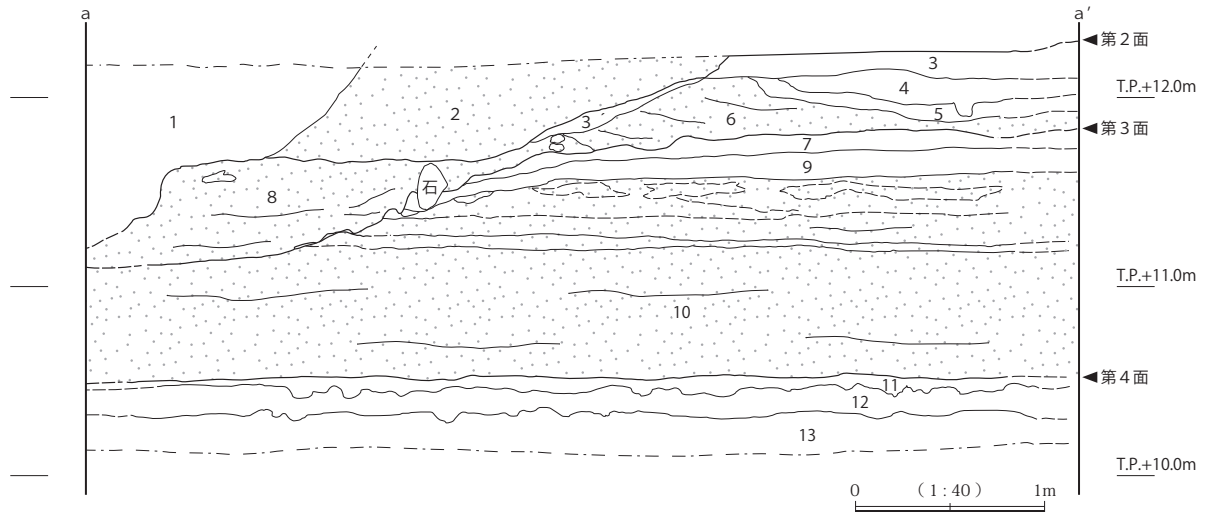
第1章 第2節 発掘調査・整理作業の経緯と経過で述べたように、2区はもともと面積が狭小な上、大きく攪乱が及んでいたため、面的な調査は行えなかった。ここでは、各層の層相と川北遺跡15-1の2トレンチ東西断面とを対比して述べる。なお時期については、川北遺跡15-1の成果に従った。

厚さ約1.6mの藤井寺ポンプ場建設に伴う盛土を除去すると、旧耕土がみられる。なお、川北遺跡15-1の2トレンチでは旧耕土は削平されており、確認されていない。

**第1層：**第1a層は、緑灰色細砂混りシルトで中砂から極粗砂粒を含む。作土層である。川北遺跡15-1の2トレンチでは旧耕土同様に攪乱により削平されて確認されていない。

**第2層：**第2a層は、明オリーブ灰色細砂混りシルトで中砂から粗砂粒を含む。作土層である。川北





- |  |   |
|--|---|
| 1. 5G4/1 暗緑灰 粗砂〜中砂混シルトと5G1.7/1 緑黒 シルトのブロック土 [攪乱] |   |
| 2. 5Y6/2 灰オリーブ 小礫混極粗砂〜中砂 ラミナあり [水成層 1 流路]        |   |
| 3. 2.5Y5/3 黄褐 シルト混細砂 中砂〜極粗砂粒多く含む [土壌層 第2-1a層]    |   |
| 3'. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混細砂 [土壌層 第2-1a層]              |   |
| 4. 2.5Y6/2 灰黄 中砂〜細砂 シルトブロック混じる [土壌層 第2-2a層]      |   |
| 5. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂混シルト 中砂〜粗砂粒含む [土壌層 第2-3a層]    |   |
| 6. 10YR6/4 にぶい黄橙 極粗砂〜中砂 小礫含む ラミナあり [水成層 第2-3b層]  |   |
| 7. 5G4/1 暗緑灰 細砂混シルト [土壌層 第3-1a層]                 |   |
| 8. 7.5Y7/1 灰白 中砂〜極粗砂 ラミナあり [水成層 2 流路]            | 11. 5G7/1 明緑灰 細砂 シルトブロック含む [土壌層 第4-1a層] |
| 9. 7.5Y6/1 灰 シルト混細砂 粗砂〜中砂粒僅かに含む [土壌層 第3-2a層]     | 12. 5G5/1 緑灰 シルト混細砂 [土壌層 第4-2a層]        |
| 10. 5Y8/1 灰白 ~5Y5/1 灰 極粗砂〜シルト ラミナあり [水成層 第3-2b層] | 13. 5G4/1 暗緑灰 シルト [土壌層 第5a層]            |

図 16 18-1-1 区 東西断面図

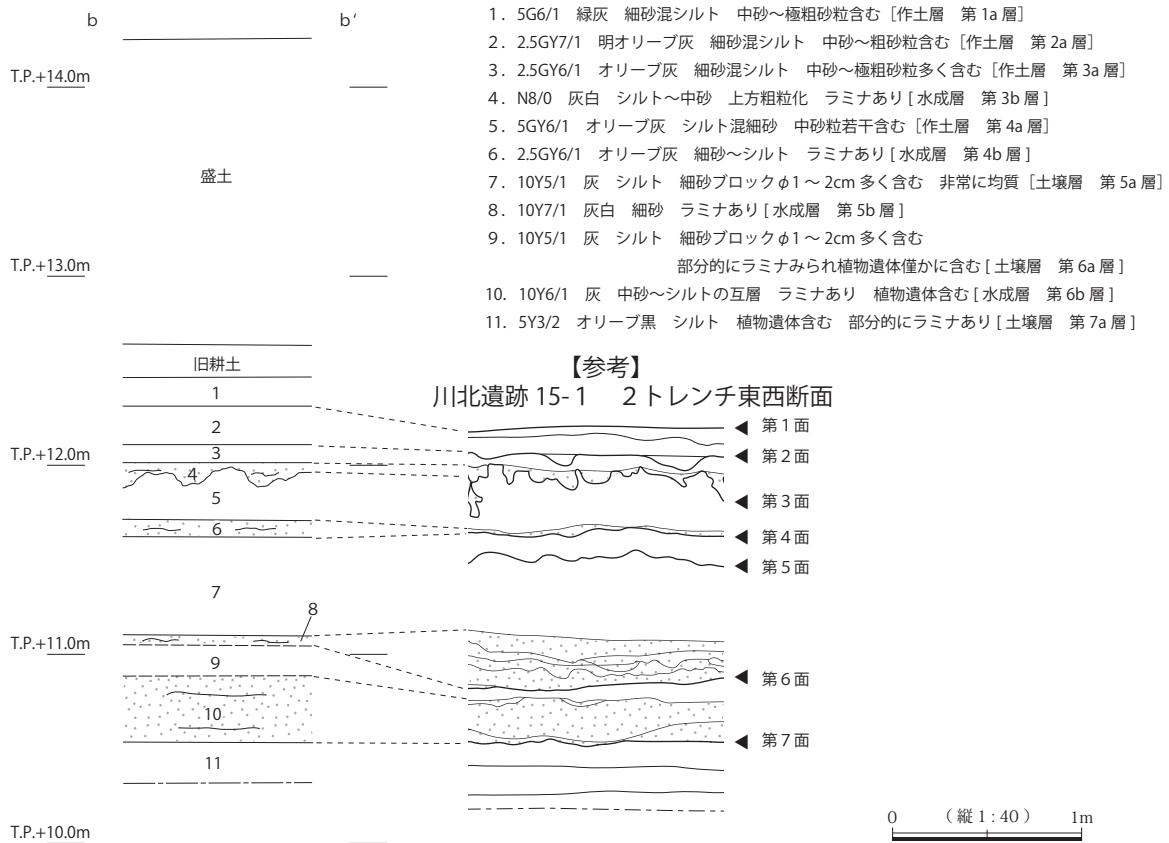


図 17 18-1-2 区 西壁断面模式図

遺跡 15-1 の 2 トレンチでは第 1-2 層及び第 1-3 層に対応する。中世から近世の時期に考えられる。

**第 3 層：**第 3 a 層は、オリーブ灰色細砂混りシルトで中砂から極粗砂粒を多く含む。作土層である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは 2-1 層に対応する。中世に考えられる層準である。

第 3 b 層は、灰白色シルトから中砂でラミナがみられる。上方粗粒化がみられる氾濫堆積物である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは第 2-2 層に対応する。

**第 4 層：**第 4 a 層は、オリーブ灰色シルト混り細砂で中砂粒を若干含む。作土層である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは、第 3-1 層に対応する。中世に考えられる層準である。

第 4 b 層は、オリーブ灰色細砂からシルトでラミナがみられる。氾濫堆積物である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは、3-2 層に対応する。

**第 5 層：**第 5 a 層は、灰色シルトで直径 1~2cm 程度の細砂ブロックを多く含む。土壌層である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは、第 4 層と第 5-1 層に対応する。時期は、古代から中世に考えられる。第 5 b 層は、灰白色細砂でラミナがみられる。氾濫堆積物である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは、第 5-2 層から第 5-6 層に対応する。

**第 6 層：**第 6 a 層は、灰色シルトで直径 1~2cm 程度の細砂ブロックを多く含む。植物遺体を僅かに含み、部分的にラミナがみられる。土壌層であるが、土壌化は弱い。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは第 6-1 層に対応し、古代に考えられる層準である。第 6 b 層は、灰色中砂からシルトの互層でラミナがみられ、植物遺体を含む。氾濫堆積物である。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは、第 6-2 層から第 6-5 層に対応する。

**第 7 層：**第 7 a 層は、オリーブ黒色シルトで植物遺体を含む。部分的にラミナがみられる。土壌層であるが、土壌化は弱い。川北遺跡 15-1 の 2 トレンチでは第 7-1 層に対応し、古代に考えられる。

## 第2節 検出遺構と遺物

### a. 遺構の検出状況

#### ・1区 第2面

第1面は機械掘削終了面であり、第2-1 a層の上面にあたる。高さは、T.P.+12.2 m前後を測り、これまでの調査成果から中世に考えられる遺構面である。

本遺構面では1流路を検出したが、上部には川北遺跡13-1から川北遺跡16-1へとのびる攪乱が存在する。

1流路は、北東肩の一部を検出したのみである。検出規模は幅約4.0 m、延長は約11.0 m、深さは約0.5 mで、南東-北西方向にのびる。流路は、ラミナがみられる灰オリーブ色小礫混り極粗砂から中砂で充填されている。肩部には暗灰黄色シルト混り細砂の土壌層が僅かにみられ、流路底は下層に位置する2流路の充填堆積物を削りながら堆積しているため不明瞭である。

流路内からは、土師器や須恵器片が出土しているが時期を特定できるものはない。

第2-3 b層からは、須恵器甕体部片と瓦器椀片が出土している。

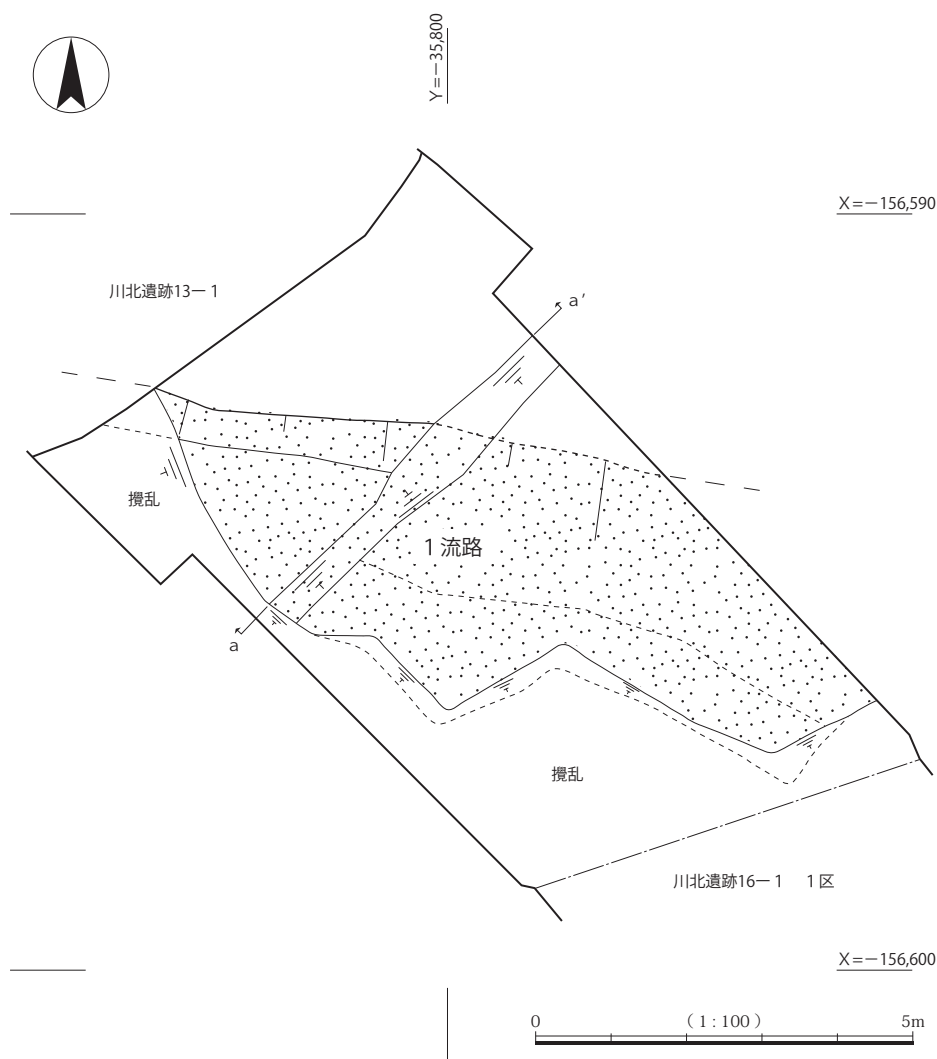


図18 18-1 1区 第2面平面図

### ・1区 第3面

第3面は、氾濫堆積物である第2-3b層を除去して検出した遺構面である。このため、本遺構面は埋没時の状況を留めている。高さは、T.P.+11.8 m前後を測り、これまでの調査成果から中世に考えられる遺構面である。

本遺構面では、2流路を検出した他、足跡や第2-3b層堆積時に挟まれた、筋状の溝が幾つもみられた。

2流路は東肩の一部を検出している。検出規模は、幅約4.0 m、延長約3.0 m、深さは0.72 mを測る。流路は、川北遺跡13-1の第3面で検出した3流路につながり、川北遺跡13-1の成果を加味すると幅5.0~7.0 m、延長は25.0 mを測る。流路の南西延長部分は図19に示すように、第2面で検出した南東-北西方向の1流路により削られて失われている。流路は、ラミナのみられる灰白色中砂から極粗砂の充填堆積物により埋没しており、肩部は堆積時の影響によるものか、砂で挟まれ丸い緑灰色細砂混りシルトブロックがゴロゴロと転がっている状況を示す。溝底には機能時の堆積と考えられる、植物遺体を含む緑灰色細砂から極細砂でややシルトを含む薄層がみられる。

流路内からは、瓦器碗や土師皿片が出土している他、須恵器・土師器片がみられた。

なお、断面観察により流路内充填堆積物と第2-2b層は、粒度やラミナの方向から区分しており、

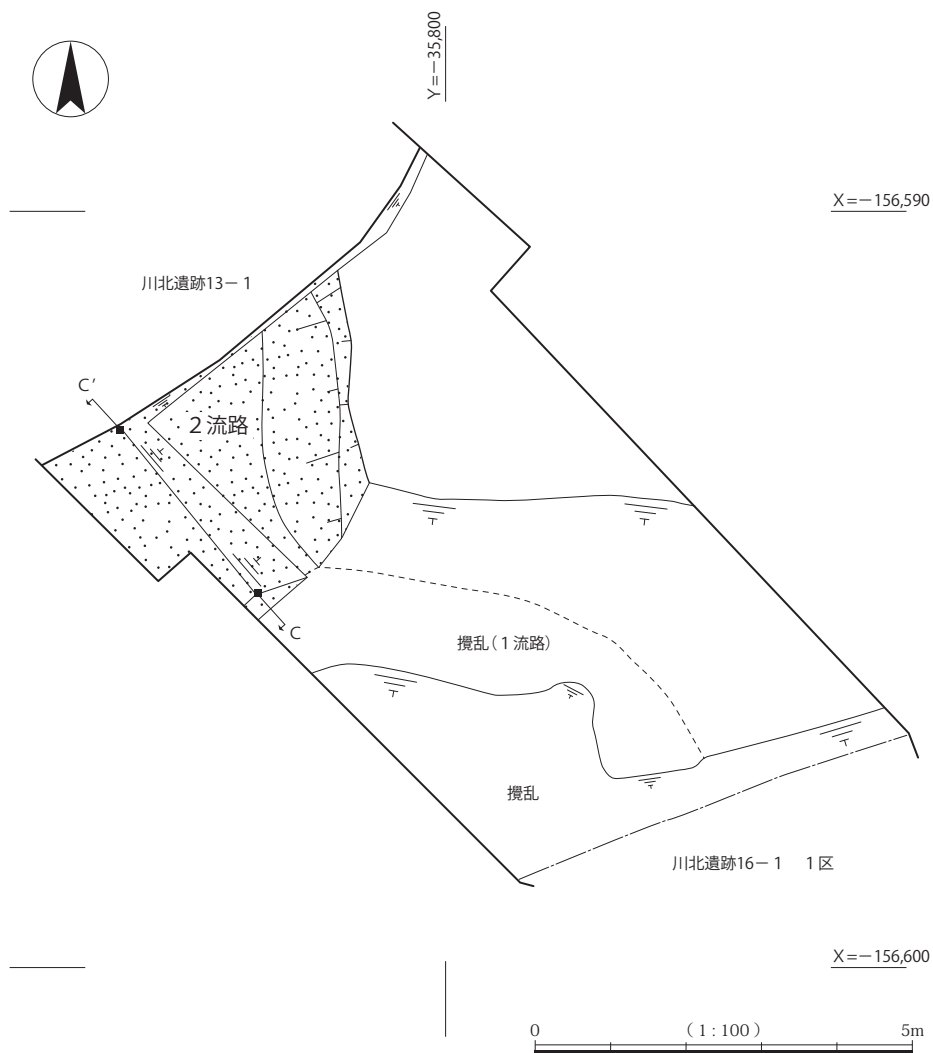


図19 18-1 1区 第3面平面図

まず、2流路が埋没したのち、第3面も含め全体を覆うような形で第2-2b層が堆積したと推測している。

第3-2b層は、第4面を覆う氾濫堆積物であり、川北遺跡16-1の第3層に対応する。層厚は約1.0mを測り、基本層序で記したように細分できる。上から順に、細砂から極細砂で粗砂から極粗砂が断続的にみられる層、小礫混りの粗砂から極粗砂層、細砂から極細砂の層、そして約60cmの厚さの中砂から極細砂の層が第4-1a層上面に堆積している。

第3-2b層からは、須恵器・土師器片、瓦器椀片や黒色土器片の他、製塩土器や円筒埴輪片、重圈文軒丸瓦や凸面に斜格子タタキや縄目タタキがみられる平瓦などの瓦類、弥生土器やサヌカイトなど、複数時期の多様な遺物が出土している。中でも、奈良時代前半の土師器や須恵器の杯・皿類がまとまって出土している点が特徴としてあげられる。

#### ・1区 第4面

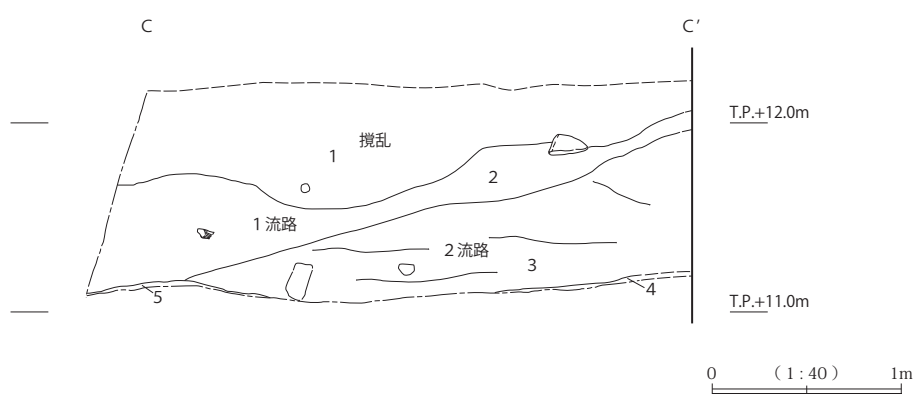
第4面は、第3-2b層を除去して検出した遺構面である。このため、遺構面は埋没時の状態を保っている。高さはT.P.+10.5m前後を測り、これまでの調査成果から古代から中世に考えられる遺構面である。

本遺構面では、3高まりを検出した他、粗砂が充填された人や動物の足跡を複数検出している。なお、第3面でみられたような遺構面を覆う氾濫堆積物で抉られたような筋状の溝はみられない。また、断面図では図示しえない、細砂から極細砂の薄層が第4面直上にはみられた。

3高まりは、高さ8cm前後を測り、第3-2b層と上述の細砂から極細砂の薄層を除去すると帯状にのびるものであるが、第4面は全体的に緩やかな凹凸がみられることから、3高まりも自然の営為によるものと考えられる。

第4面直上の細砂から極細砂の薄層から、小片ではあるが黒色土器B類の口縁片が1点出土している。

なお、第4面を最終遺構面としたが、さらに50cm程掘り下げて調査を終了している。この過程で遺構は検出できなかったが、須恵器杯片が1点出土している。



1. 5G4/1 暗緑灰 細砂混シルト・粗砂・5G2/1 緑黒 細砂混シルトのブロック土 [攪乱]
2. 5Y5/1 灰 中砂～極粗砂 小礫含む 5G4/1 暗緑灰 細砂混シルトブロックφ2～3cm 多く含む ラミナあまり見られない [1流路内充填堆積物]
3. 5Y8/1 灰白 中砂～極粗砂 小礫含む 5G6/1 緑灰 細砂混シルト (第3-1a層) ブロックφ3～10cm 含む [2流路内充填堆積物]
4. 5G5/1 緑灰 細砂～極細砂 ややシルト含む 植物遺体若干含む [2流路内 機能時堆積]
5. 5G6/1 緑灰 細砂混シルト [2流路内 第3-1a層のブロック]

図20 18-1 1区 第3面 2流路縦断面図

## b. 遺物の出土状況と時期

今回の調査では、第3-2 b層と呼称している氾濫堆積物から出土した遺物がほとんどを占める。16-1を含むこれまでの調査でも、第3-2 b層に対応する層からは多量の遺物が出土しているが、小片や摩耗しているものが多い。これまでの調査成果から第3-2 b層が堆積するのは11世紀以降と考えられているが、奈良時代の遺物がまとまって出土している点は特徴である。

以下、第3-2 b層から出土した遺物を図22および写真図版11に掲げ、記述する。

奈良時代の遺物としては、図22-202・203・204・206・208・209、写真図版11-211・212・213・218がある。202は須恵器杯B、203は須恵器杯蓋で、8世紀初頭に考えられる。204は土師器皿Bで、内面には一段の放射状暗文と、見込に螺旋状暗文が施される。8世紀中頃に考えられる。写真図版11の211・212は、土師器皿で8世紀後半に考えられる。213は土師器鉢で、8世紀中頃に考えられる。218は丸底の製塩土器の口縁部である。

瓦類では、206の三重圏文の軒丸瓦が出土している。丸瓦部と瓦当の一部は失われている。瓦当の復元直径は16cmで、三重圏文の中心部は欠損しているため陽刻の有無は不明である。208は平瓦で

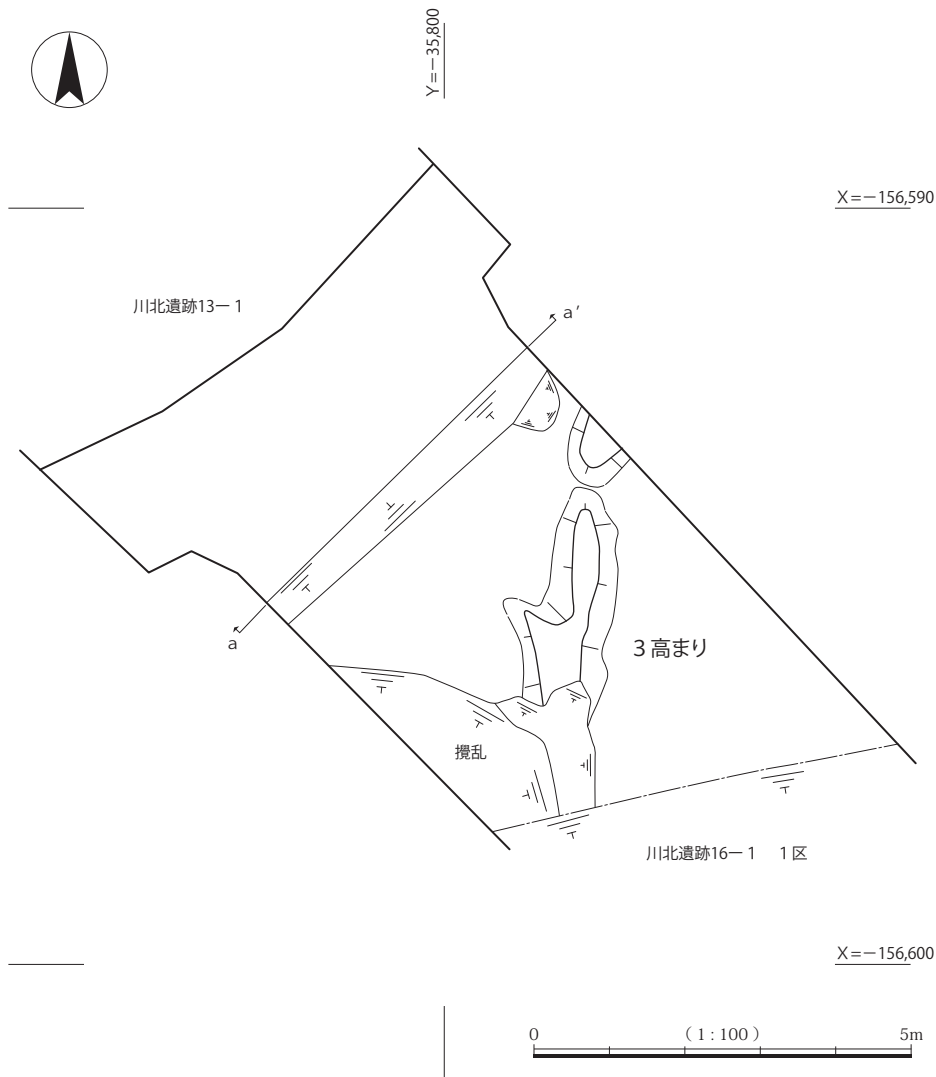


図21 18-1 1区 第4面平面図

凹面は布目、凸面は荒い縄目タタキが残る。209も平瓦で凹面は布目、凸面は細い縄目タタキが残る。

そのほかの瓦類では、鎌倉時代と考えられる凸面に斜格子タタキが残る平瓦、図22-207が出土している。

前述の一群の土器よりもやや時期がさかのぼる飛鳥時代に考えられる写真図版11-214・215・216も出土している。214は土師器杯Cで、内面に粗い放射状暗文を施す。7世紀後半に考えられる。215は須恵器蓋で、7世紀後半と考えられる。216は須恵器杯で、7世紀前半に考えられる。

古墳時代の遺物としては、図22-210、写真図版11-217・219がある。217は須恵器杯蓋で、5世紀中頃に考えられる。

210・219は円筒埴輪である。断面が台形の突帯でB種ヨコハケが施される。破片のため、黒斑の有無は不明である。5世紀後半と考えられる。

弥生時代の遺物としては、図22-205と写真図版11-220がある。205は生駒西麓産の胎土の弥生時代中期中頃の広口壺で、口縁部に簾状文が施される。220は弥生時代後期の甕の底部である。

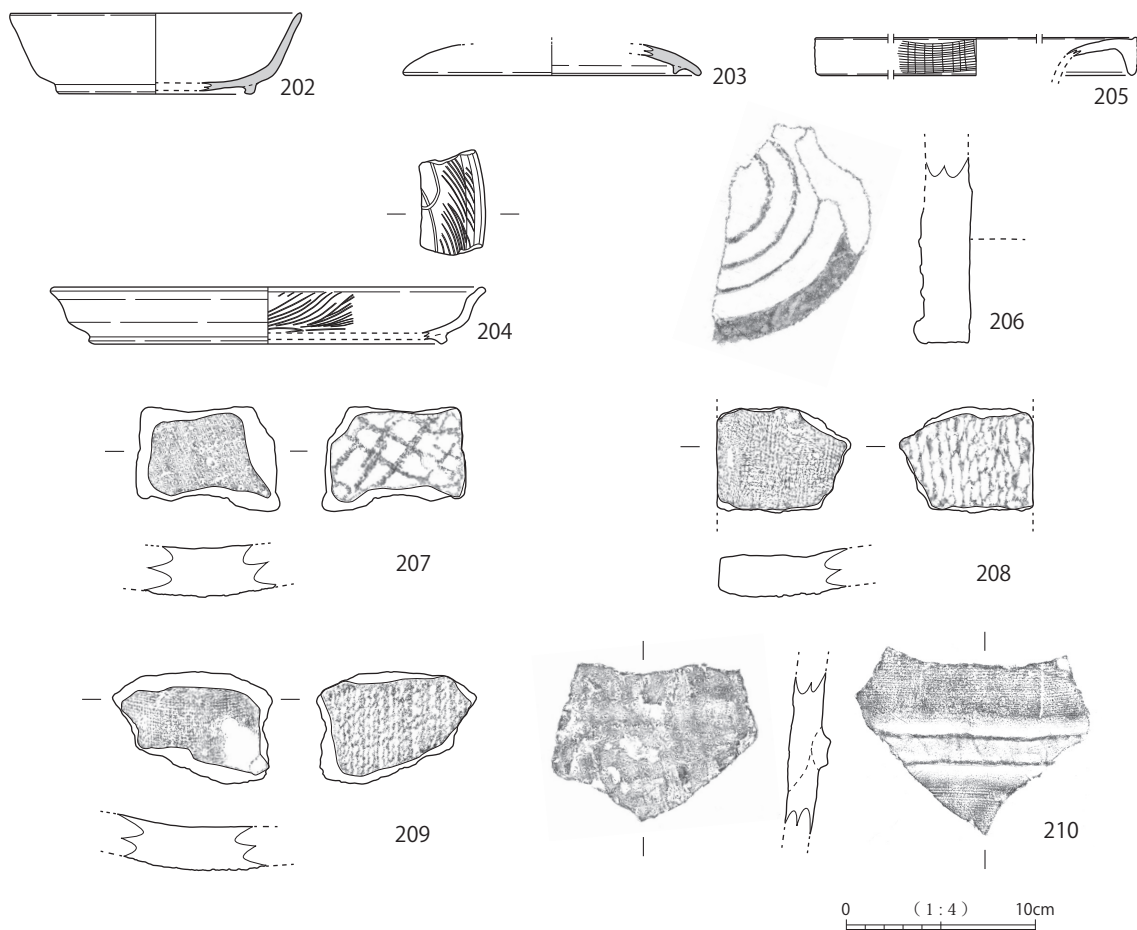


図22 18-1 1区 2-3b層出土遺物

表6 18-1 遺物観察表 1

掲載番号	調査区	層位・遺構	器種	時期		備考
202	1	3-2 b層	須恵器 杯B	8世紀初	奈良時代	
203	1	3-2 b層	須恵器 杯蓋	8世紀初	奈良時代	
204	1	3-2 b層	土師器 皿B	8世紀中頃	奈良時代	
205	1	3-2 b層	弥生土器 広口壺		弥生時代中期	
206	1	3-2 b層	重圏文軒丸瓦	8世紀	奈良時代	
207	1	3-2 b層	平瓦		鎌倉時代	
208	1	3-2 b層	平瓦		奈良時代	
209	1	3-2 b層	平瓦		奈良時代	
210	1	3-2 b層	円筒埴輪	5世紀前半	古墳時代	
211	1	3-2 b層	土師器 皿	8世紀後半	奈良時代	※ 写真のみ掲載
212	1	3-2 b層	土師器 皿	8世紀後半	奈良時代	※ 写真のみ掲載
213	1	3-2 b層	土師器 鉢	8世紀中頃	奈良時代	※ 写真のみ掲載
214	1	3-2 b層	土師器 杯C	7世紀後半	飛鳥時代	※ 写真のみ掲載
215	1	3-2 b層	須恵器 蓋	8世紀後半	奈良時代	※ 写真のみ掲載
216	1	3-2 b層	須恵器 杯身	7世紀前半	古墳時代	※ 写真のみ掲載
217	1	3-2 b層	須恵器 杯蓋	5世紀中頃	古墳時代	※ 写真のみ掲載
218	1	3-2 b層	製塩土器 丸底		奈良時代	※ 写真のみ掲載
219	1	3-2 b層	円筒埴輪	5世紀前半	古墳時代	※ 写真のみ掲載
220	1	3-2 b層	弥生土器 甕		弥生時代後期	※ 写真のみ掲載



## 第6章 総括

調査では縄文時代から中世にかけての遺物が出土した。これまでの調査でも縄文晩期の土器は出土しているが、今回出土したものを子細に観察したところ、表面に縄文とみられる痕跡がみられ、縄文時代中期まで遡りうるものであることがわかった。川北遺跡の南東に接する船橋遺跡では、縄文時代晩期後葉の遺物包含層が広範囲に分布することは知られているが、縄文時代中期の様相については周辺の遺跡を含めてよくわかっていない。今回の出土例により縄文時代中期においても、近接する地域に何らかの生活痕跡が存在した可能性は示唆できよう。

弥生時代から古墳時代にかけての遺物も一定量出土している。その中でもサヌカイト製の打製石器や剥片の出土量が、当該期の弥生土器の出土量を上回る点が特筆される。石川左岸の低位から中位段丘にかけて所在し、石器生産地と考えられている遺跡の石器出土量や内容には及ばないが、当遺跡でもこれに準ずる調査成果がえられた。この点を踏まえ、石器生産に関わった集落に近い立地ということを考えあわせると、それらの集落を介して素材を入手し、石器生産を行っていた可能性が考えられる。

出土遺物の内、量的に多くを占めていたのは古代のものである。子細に観察すると、古代の土器の中には墨書土器や漆加工の痕跡をうかがわせる土器や、硯として使用されたものが含まれることがわかった。租税としての漆の収集と貯蔵は、古代の役所である国府などで行われていたが、漆の加工に関わった工房は、役所や寺の周辺に存在した傾向があることがこれまでの研究で指摘されている。

一方、硯はすべて転用品であり、それらの出土状況は、直近に役所がある場合とはやや異なる。ただ文字を書く人の存在がうかがえるのに加え、漆を加工する工房が近辺にあったと思われる状況から、古代寺院や役所の周辺に存在した集落のあり様がうかがえる。なおこれらの遺物はおおむね8～9世紀に含まれる。

16 - 1 で検出した遺構はそれよりも時期が下る、10世紀代に形成されたものであるが、当遺跡において古代における居住域の痕跡が認められた意義は大きい。

### 引用文献

- 財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998 『船橋遺跡』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 29 集  
 別所秀高 2002 「八尾市志紀遺跡における縄文時代～中世の堆積環境の変化過程とそれらに対応した耕作地の開発」『志紀遺跡（その2・3・5・6）』財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 73 集  
 財団法人大阪府文化財センター 2005 『船橋遺跡Ⅱ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 128 集  
 財団法人大阪府文化財センター 2005 『船橋遺跡Ⅲ』財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 129 集  
 公益財団法人大阪府文化財センター 2013 『川北遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 243 集  
 井上智博 2014 「遺跡周辺の表層地形とその形成過程」『田井中遺跡3』公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書第 249 集  
 財団法人八尾市文化財調査研究会 1984 『木の本遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告 4  
 川越俊一 1991 『漆の貯蔵・運搬方法に関する基礎的研究』実績報告書 科学研究費助成事業 一般研究 (C)

# 写 真 图 版





1. II区 東壁土層断面 (北西から)



2. II区 東壁土層断面 (X= - 156,605 あたり) (北西から)



3. II区 東壁土層断面 (X= - 156,605 あたり) (北西から)



4. II区 東壁土層断面 (X= - 156,615 あたり) (西から)



5. II区 東壁土層断面 (X= - 156,620 あたり) (西から)



6. II区 東壁土層断面 (X= - 156,635 あたり) (西から)



7. II区 東壁土層断面 (X= - 156,668 あたり) (西から)



8. II区 東壁土層断面 (X= - 156,675 あたり) (北西から)



1. I区 第1層除去面（南西から）



2. II区 第1面遺構検出状況（南から）



3. II区 2ピット断面（西から）



4. II区 6溝断面（西から）



5. II区 4・5ピット断面（西から）



6. II区 4・5ピット完掘状況（西から）



7. II区 1ピット完掘状況（西から）



8. II区 3ピット完掘状況（西から）



1. II区 第1面遺構検出状況（南西から）



2. II区 第1面遺構検出状況（南から）



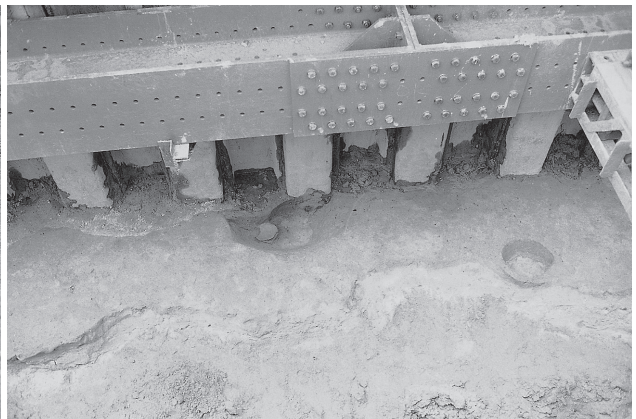
3. II区 9ピット・10土坑断面（西から）



4. II区 8ピット断面（西から）



5. II区 7土坑断面（西から）



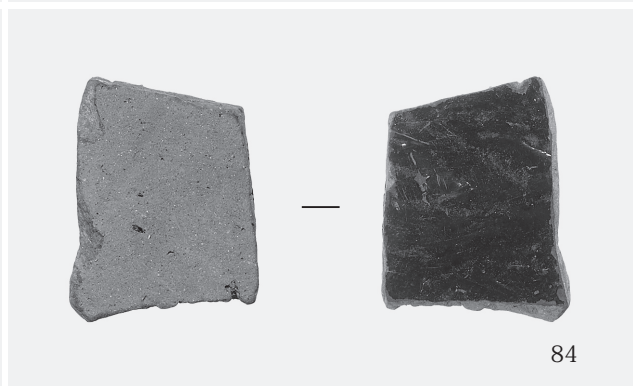
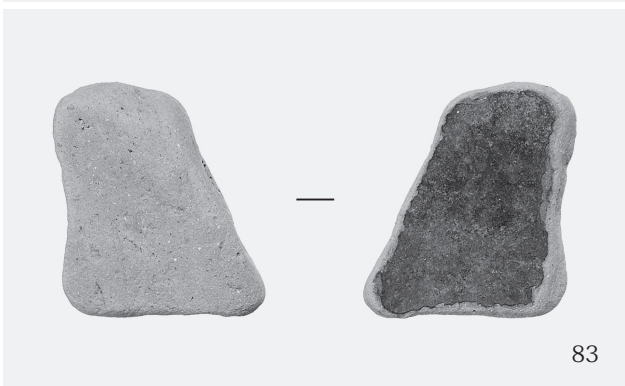
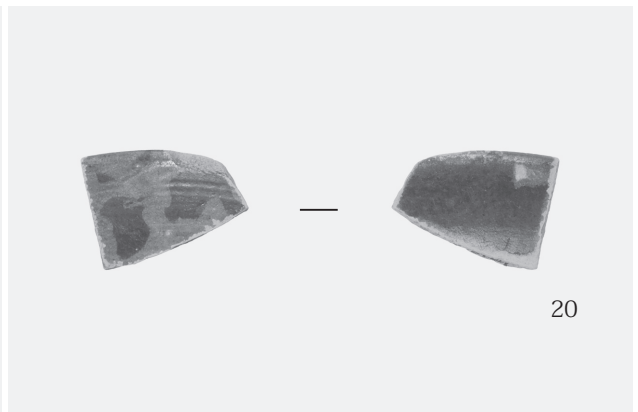
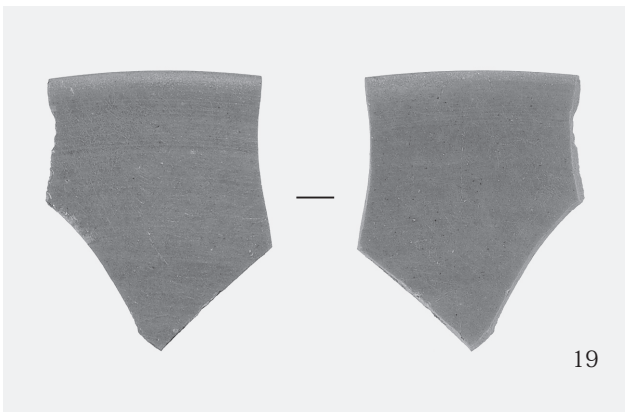
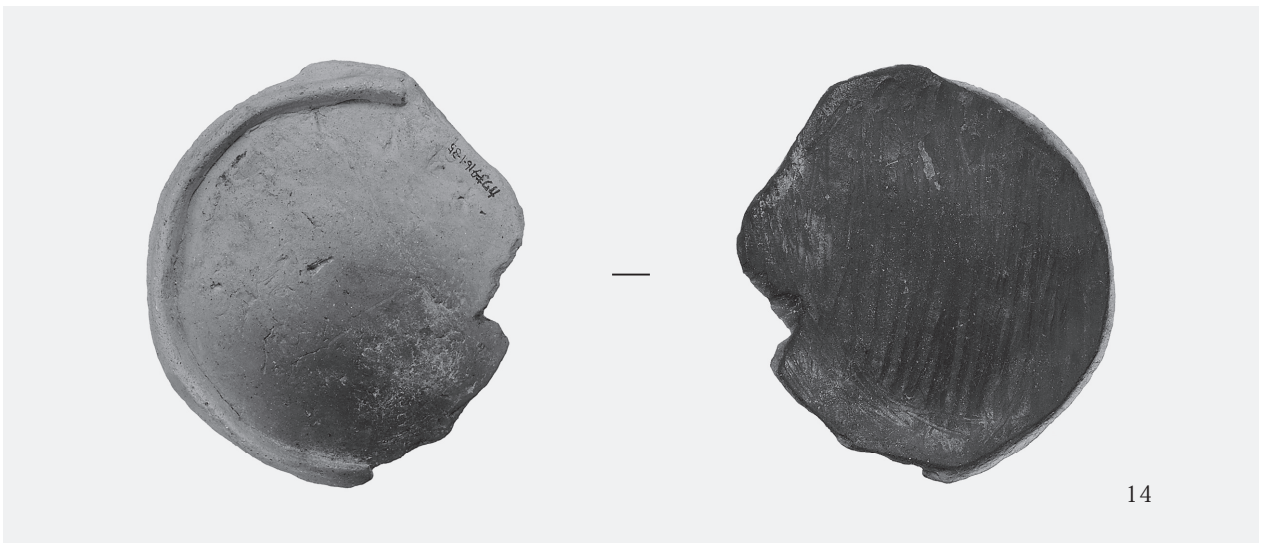
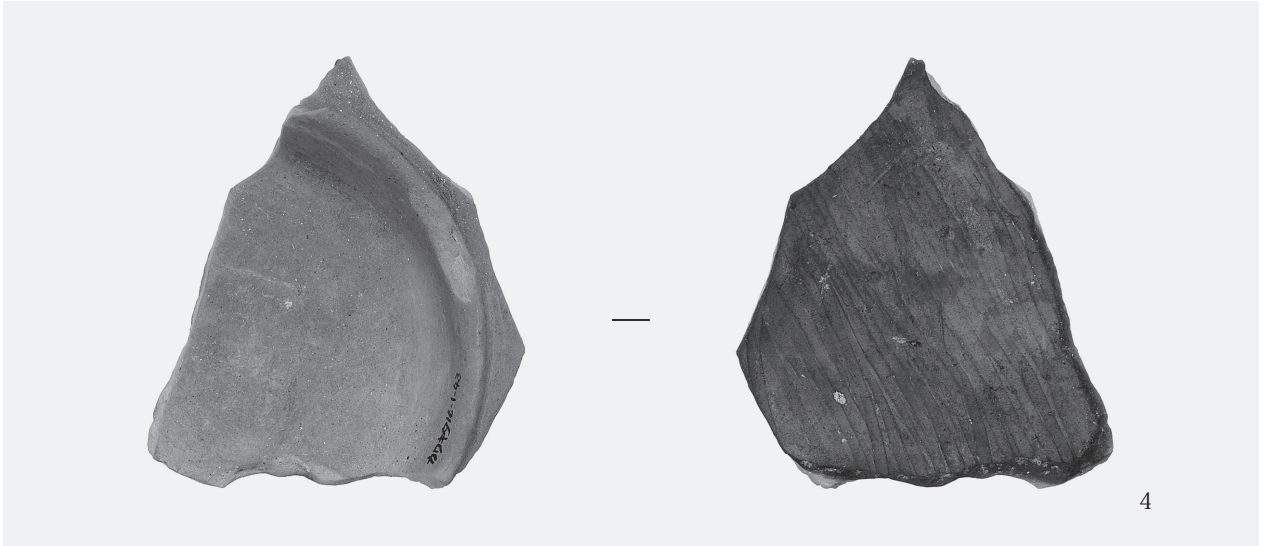
6. II区 7土坑・8ピット完掘状況（西から）

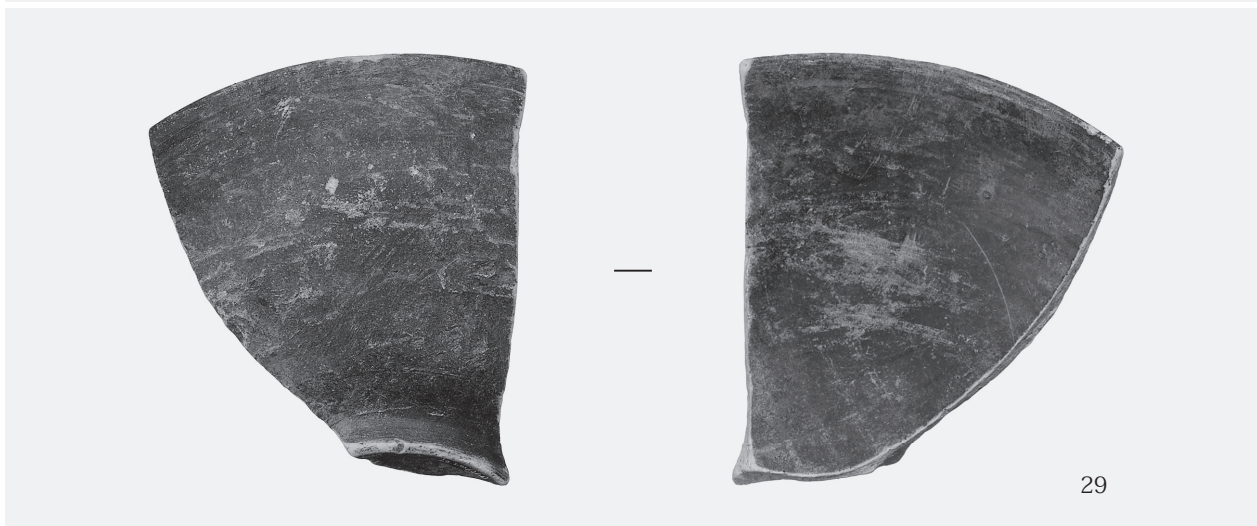
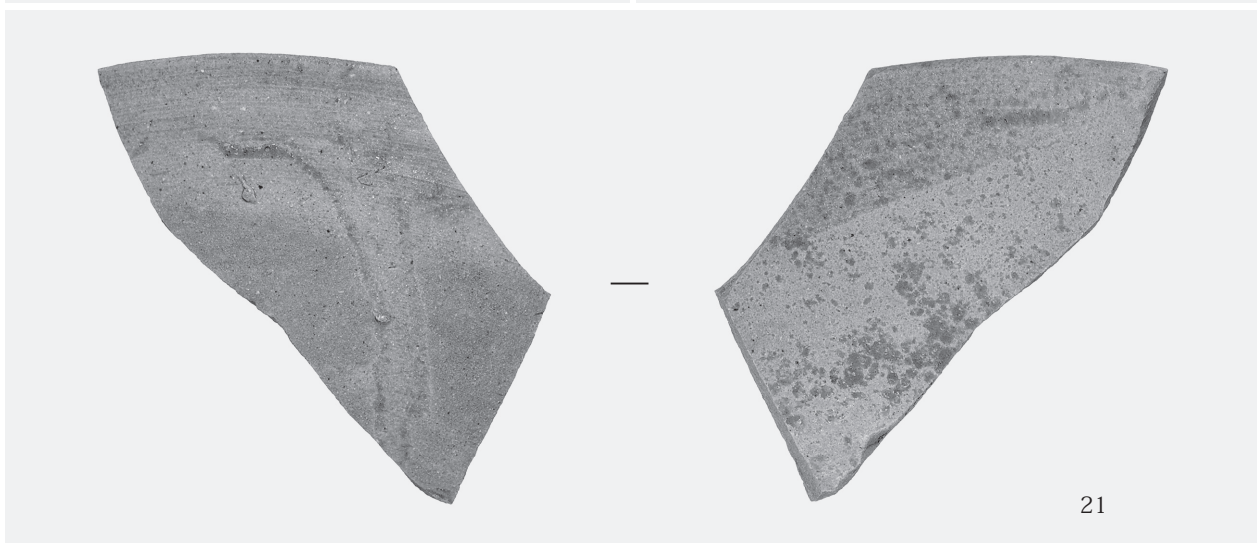
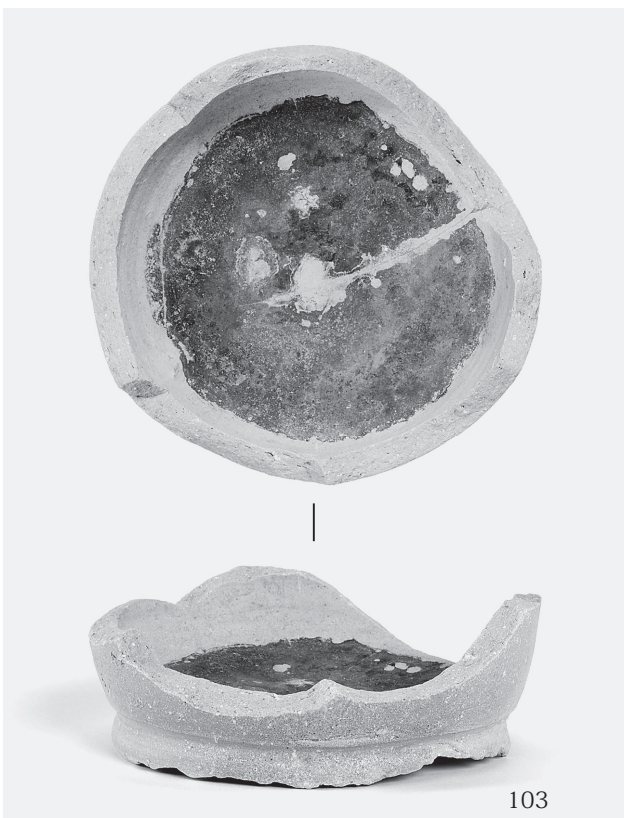
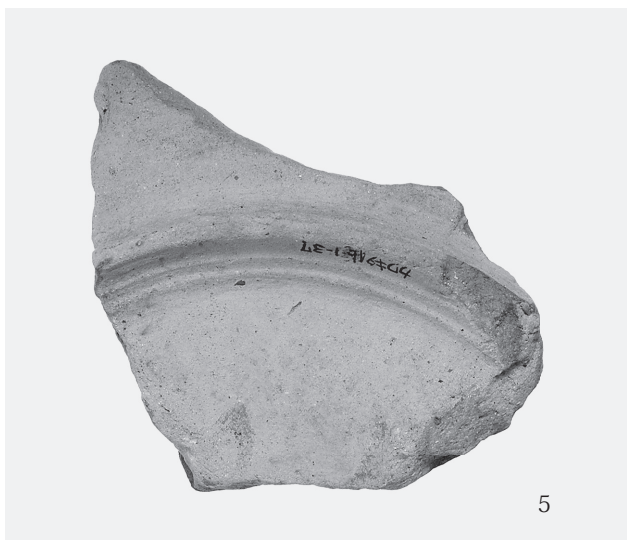


7. II区 18G - 10a 第2面検出状況（北西から）

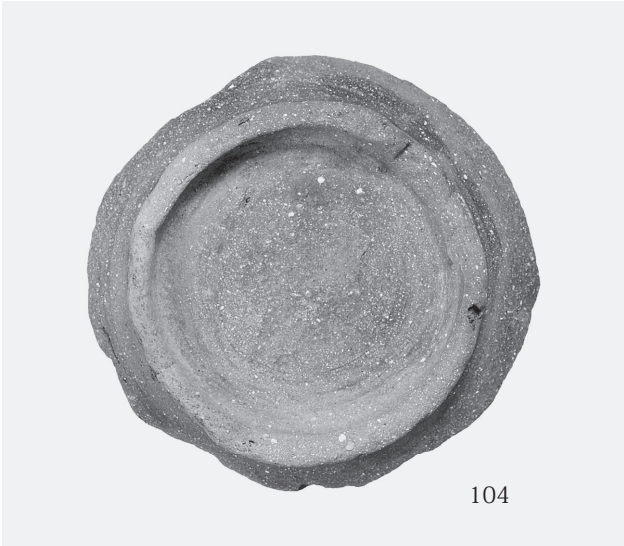


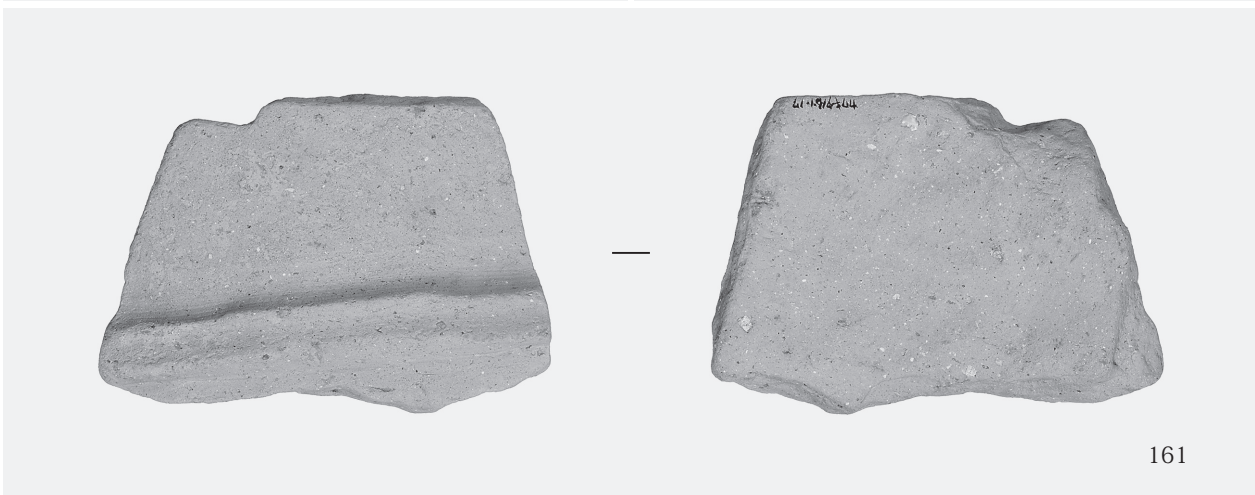
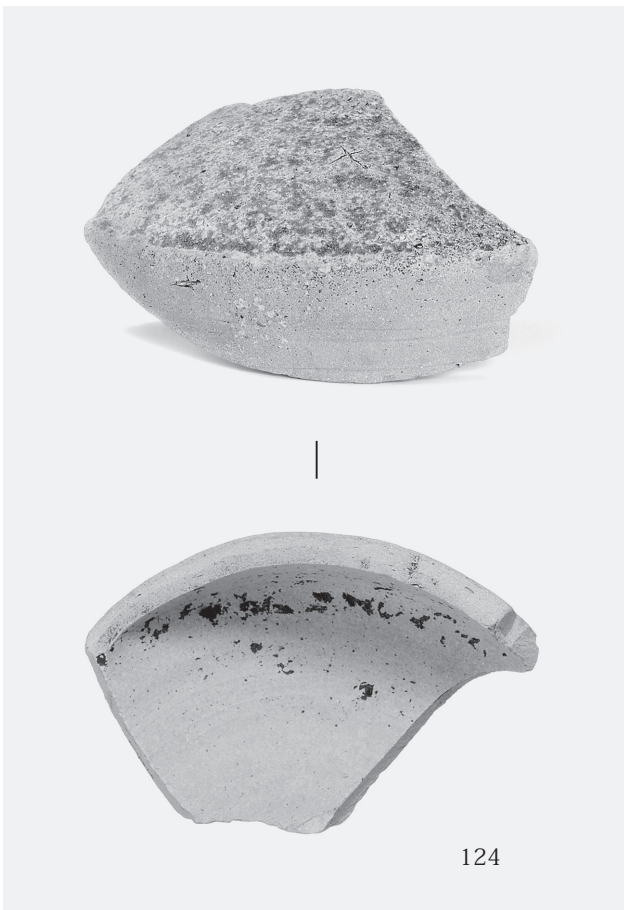
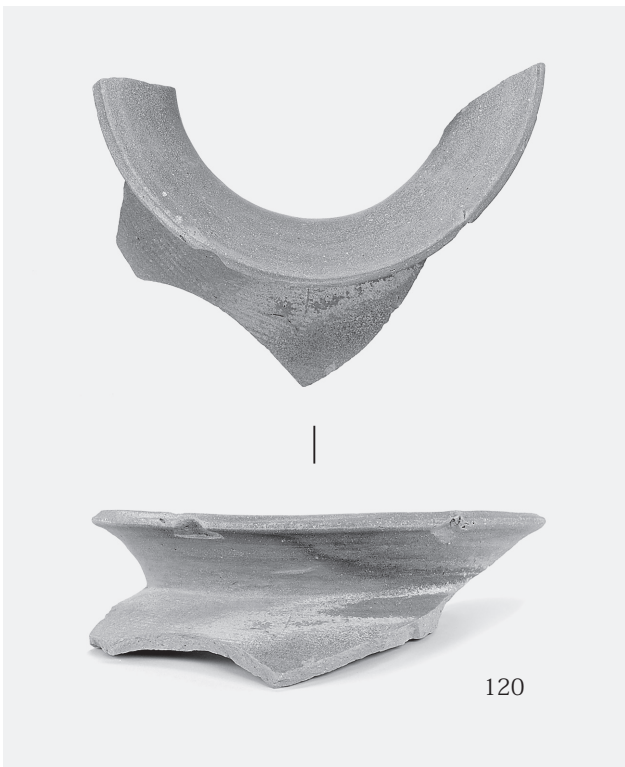
8. II区 18G - 10g 第2面検出状況（北西から）

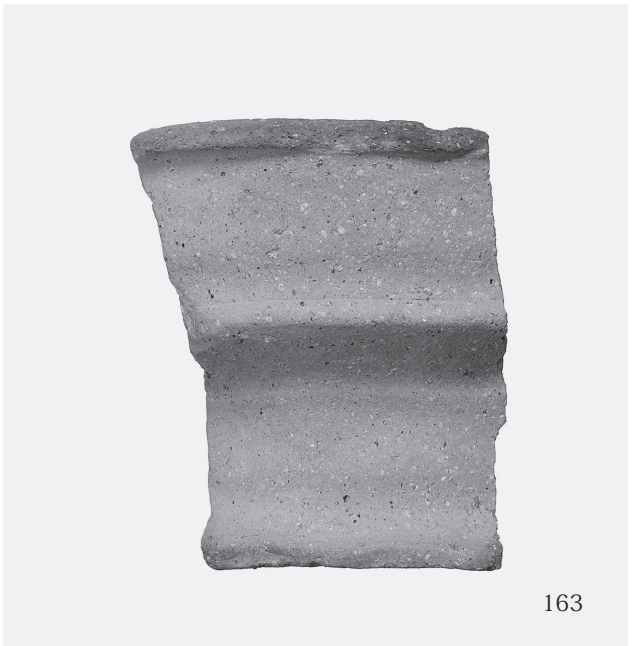
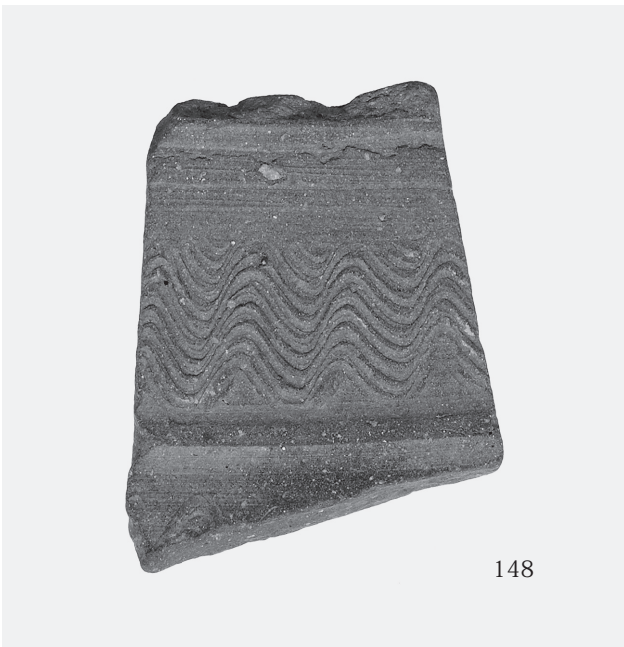
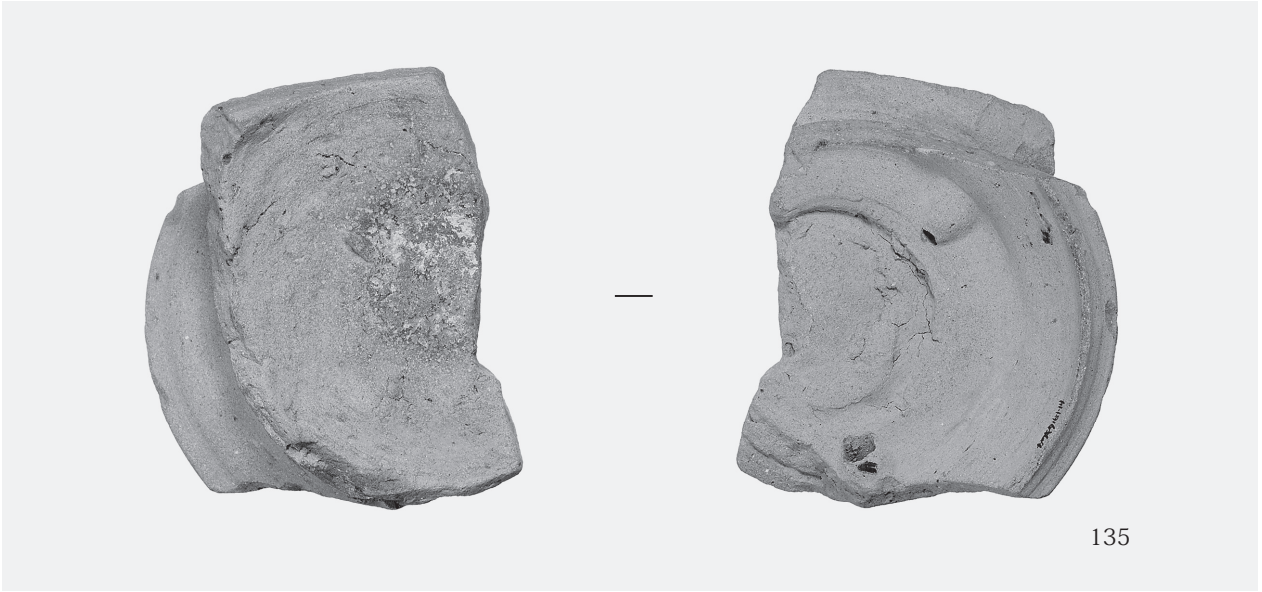














1. 1区 東西断面① (南東から)



2. 1区 東西断面② (南東から)



3. 1区 東西断面③ (南東から)



4. 1区 東西断面④ (南東から)



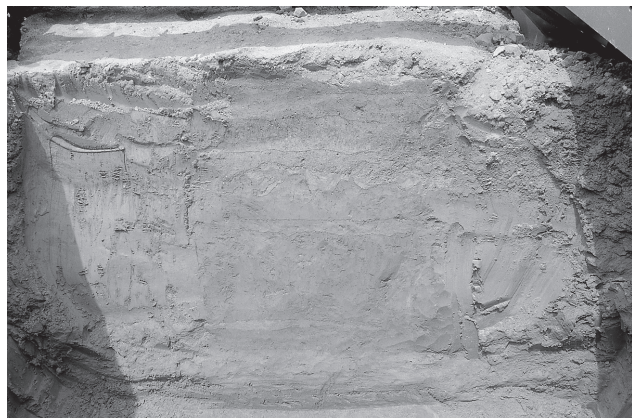
5. 1区 第3面 2流路縦断面 (北東から)



6. 1区 第4面 足跡 (南から)



7. 2区 完掘状況 (北から)

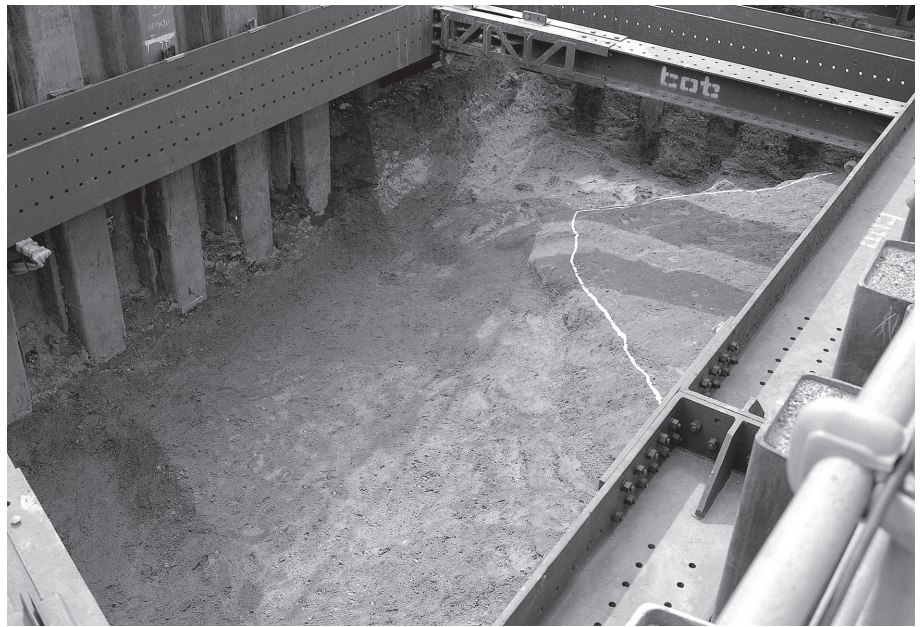


8. 2区 西壁断面 (東から)

1. 1区 第2面全景 (南東から)

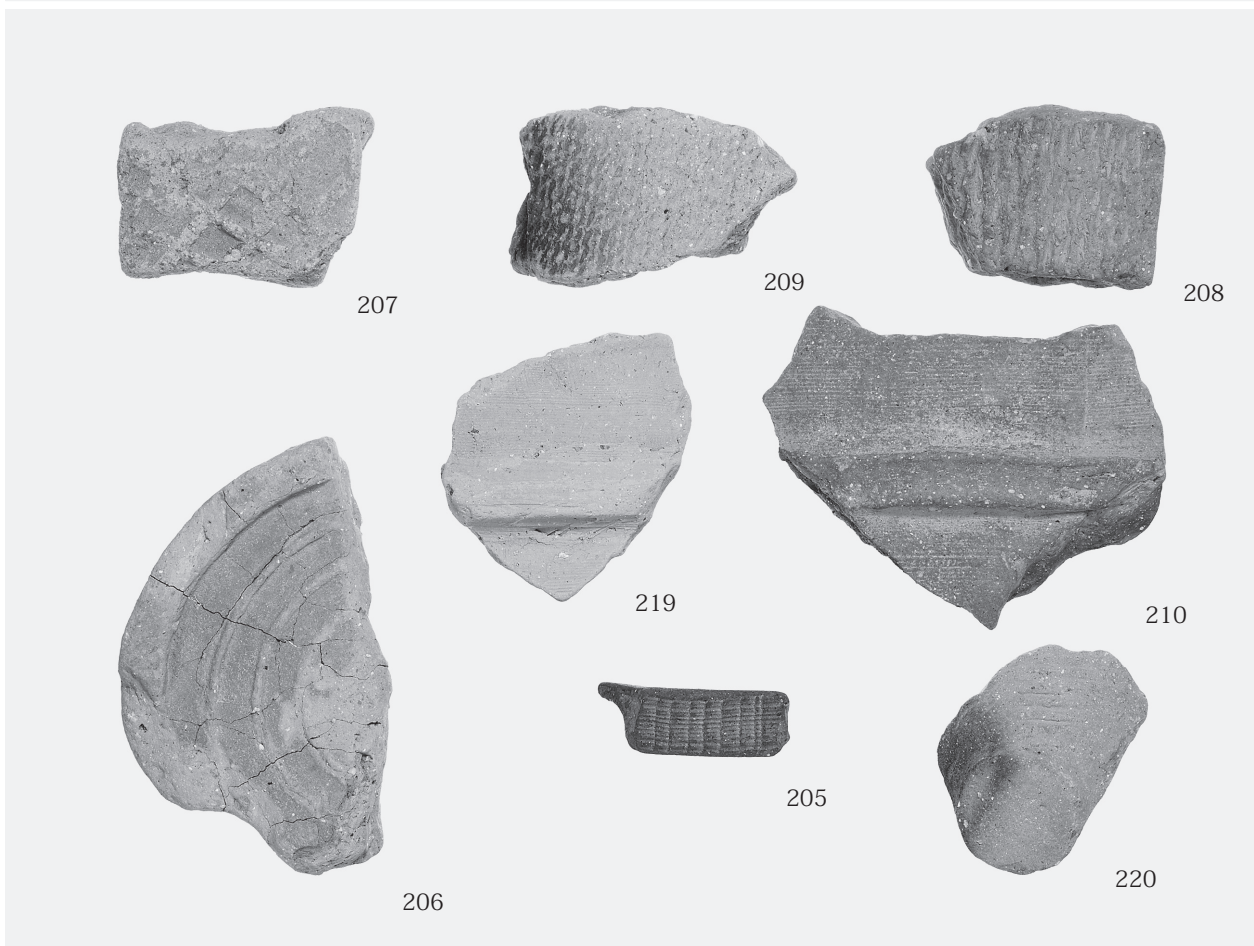
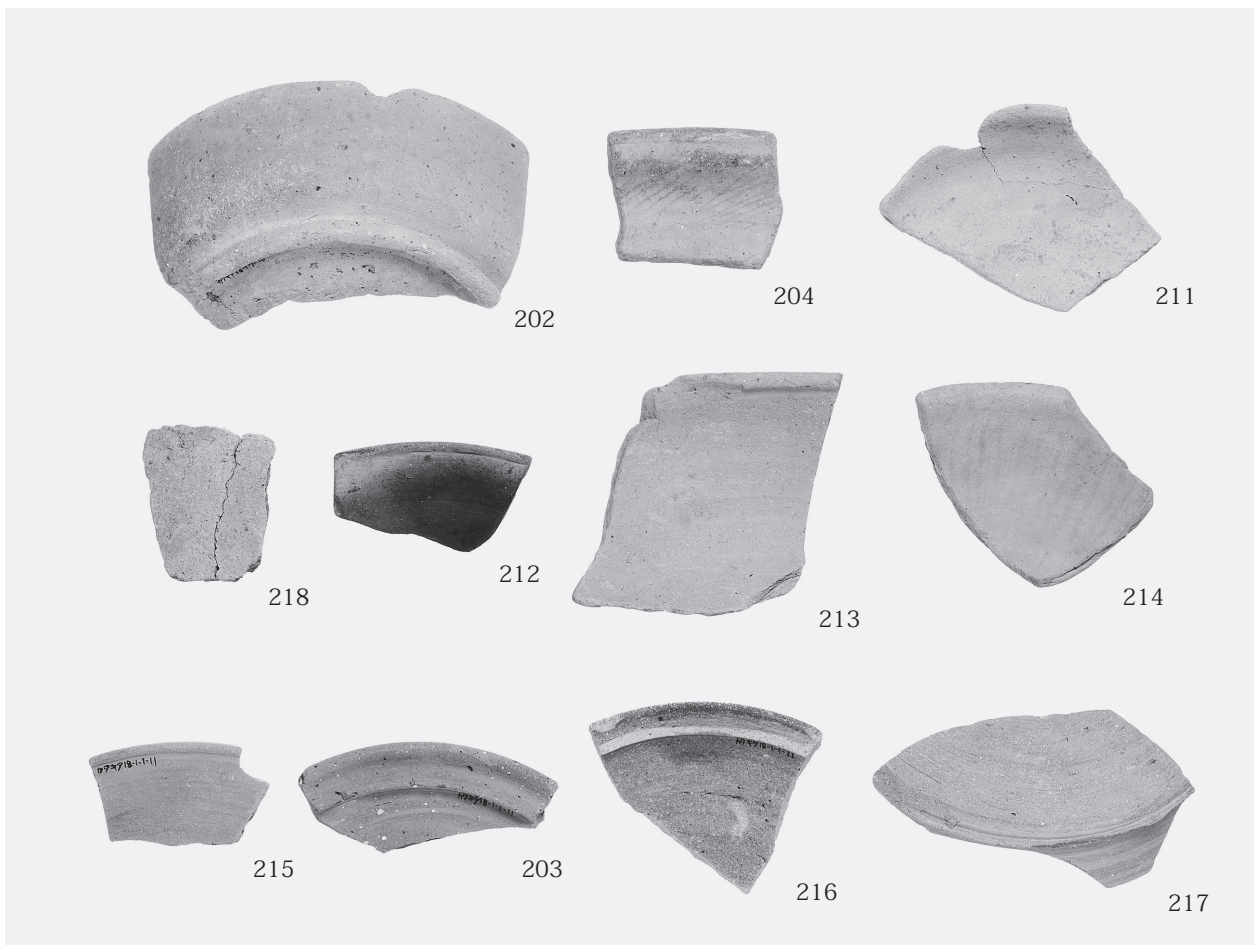


2. 1区 第3面全景 (東から)



3. 1区 第4面全景 (東から)





# 報告書抄録

ふりがな	かわきたいせき							
書名	川北遺跡3							
副書名	バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第294集							
編著者名	若林幸子・佐伯博光							
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号 ☎072-299-8791							
発行年月日	2018年11月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
かわきたいせき 川北遺跡	おおさかふふじいでらし 大阪府藤井寺市  かわきたいちょうめ 川北1丁目  ちない 地内	27226	80	34° 35' 04"	135° 36' 45"	川北遺跡16-1 20170104～ 20170323	569㎡	バイパス送水管 （藤井寺～長吉） 整備工事
						川北遺跡18-1 20180702～ 20180730		
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
川北遺跡	集落跡	弥生・古墳	柱穴・土坑・溝・ ピット・流路	瓦器・須恵器・土師器・黒色土器・ 緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・弥生土器・ 縄文土器・土製品・瓦・埴輪・ 打製石器・サヌカイト剥片				
要約	<p>旧河道とその近辺に形成されていた居住域の痕跡を検出した。遺構埋土や遺物包含層、旧河道の埋土から遺物がまとまって出土した。旧河道から出土した遺物が最も多く、縄文時代から中世までの様々な時期のものを含む。これらは、旧河道の貫入により周辺の包含層が流水で削られそこに含まれていた遺物が混入したものや、近辺から流れ着いたものが含まれると思われる。</p> <p>古代の土器の中には漆の貯蔵壺や、パレットとみられる土器片が含まれていたことから、漆を用いる工房が周辺に存在した可能性がある。さらに重圏文軒丸瓦が出土しているほか、平瓦片の出土もみられることから、瓦葺の建物が周辺に存在する可能性が考えられる。</p> <p>また、弥生時代としては、石器の製作時に発生した剥片などが出土していることから、打製石器の製作にかかわる集落が近辺に存在した可能性も指摘できる。</p>							

公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第 294 集

## 川 北 遺 跡 3

バイパス送水管（藤井寺～長吉）整備工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2018 年 11 月 30 日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号

印刷・製本 / 株式会社 明新社

〒630-8141 奈良市南京終町 3 丁目 464 番地